

安部公房の読者のための通信 世界を变形させよう、生きて、生き抜くために！



月  
刊

# もぐら通信

*Mole Gazette for Kobo Abe's Readers*

2014年1月31日初版、同年2月11日 第二版 第17号 [www.abekobosplace.blogspot.jp](http://www.abekobosplace.blogspot.jp)

あなたへ：  
迷う事のない迷路を通して  
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい

## ニュース&記録

(<http://seesaawiki.jp/w6allen/>)

### 水なきよしさん亡くなる

昨年上演された笛井事務所プロデュース公演「友達」、「棒になった男」の演出家、水なきよしさんが1月24日朝、永眠されました。合掌。

### 大阪万博での安部公房脚本『1日240時間』が上映されます

東京大学大学院の記録映画アーカイブ・プロジェクトで、大阪万博での『1日240時間』（1970年、監督：勅使河原宏、脚本：安部公房）が上映されます。パネリストは友田義行氏（信州大学）：3月1日（土）13:30-17:30：東京大学本郷キャンパス（赤門横）  
福武ホール・ラーニングシアター（B2F）

<http://www.kirokueiga-archive.com/event/index.html>

### 東京自由大学で「安部公房」の講座が開催されます

東京自由大学で2月8日（土）「安部公房 ～越境する世界文学～」鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）の講座が開催されます。：東京自由大学（神田駅5分）にて14時～17時

<http://jiyudaigaku.la.coocan.jp/>

## 読売新聞に「安部公房の自宅 取り壊しへ」の記事が掲載されました

去る2月4日付読売新聞朝刊に「安部公房の自宅 取り壊しへ」の記事（待田晋哉記者）が掲載されました。自宅を訪れた印象、安部ねりさんの感想、そして安部文学再評価の機運について、また近藤一弥氏のコメントも。「もぐら通信」も紹介されています。

## 関西安部公房オフ会の第6回読書会は3月1日に開催されます

関西安部公房オフ会の第6回読書会は、3月1日（土）午後1時～5時、JR花園駅4分京都市右京ふれあい文化会館にて、テーマは『壁』で開催されます。詳細は<http://w1allen.seesaa.net/article/385336524.html> にて。

## 心斎橋で安部公房読書会が開かれました

柏木静氏の主宰で、去る1月22日（水）の安部公房の命日の夜、大阪心斎橋のアメリカ村ガンジャにて「安部公房の不可能 ～ガンジャで読書会～ 課題本：“箱男”」が開催されました。参加者は3名でしたが、深く語り合いました。本号に柏木氏による読書会報告が掲載されています。

## 俳優座で11月に安部公房作『巨人伝説』が公演予定です

11月6日（木）～16日（日）俳優座劇場にて眞鍋卓嗣演出で公演予定です。<http://www.haiyuza.net/>

## 安部公房関連論文が公開されています

「川上弘美「離さない」：安部公房「人魚伝」との比較を中心に」  
馬場真美子 立教大学大学院日本文学論叢 13号2013年10月 <http://goo.gl/QAoPbl> よりダウンロードできます。

## うずめ劇場 第26回公演 「砂女←→砂男」

原作：安部公房／E. T. A. ホフマン 演出：ペーター・ゲスナー／天野天街（少年王者館） ■公演期日 2014年 2月7日～11日 昼・夜1回づつ計10回（『砂女』5回、『砂男』5回） ■公演会場 ザ・スズナリ（下北沢演劇祭参加）  
うずめ劇場のオフィシャルサイト：<http://uzumenet.com> ■観劇したいという方を20名限定で無料ご招待します。「砂女」の単独のチケットか「砂女←→砂男」の両方の公演が観られるチケットの2種類いずれか。申込は同じく荒井さん迄：[arainobita@gmail.com](mailto:arainobita@gmail.com)



「靴」の名文句が「SF名文句・迷文句集」と「ファンタジー名文句・迷文句集」に収録されました

「靴」（『笑う月』所収）の名文句を、「SF名文句・迷文句集」（<http://dabensya.sakura.ne.jp/meimonku/monku324.htm>）と「ファンタジー名文句・迷文句集」（<http://fantasymeimonku.web.fc2.com/meimonku/monku012.htm>）に投稿したところ、見事採用されました。両サイトとも、同じフレーズです。どんなフレーズかは、サイトに行ってお楽しみです。

## 目次

- 1。表紙ニュース...page 1
- 2。目次...page 4
- 3。安部公房氏との打ち合わせ記録（1）：長与孝子...page 5
- 4。うずめ劇場ゲスナー氏インタビュー：編集部・岩田英哉...page 12
- 5。もぐら通信、池田龍雄先生に会いに行く：w1allen/岡田裕志...page 17
- 6。東京・安部公房・パーティー『方舟さくら丸』読書会報告  
～方舟はいまだ発進せず？～：ホッタタカシ...page 23
- 7。大麻と箱男：柏木静...page 30
- 8。もぐら忌（公房忌）句集：睡蓮/OKADA HIROSHI...page 34
- 9。『私の本棚より』：『安部公房を語る』（あさひかわ社）：  
岡田裕志...page 36
- 10。質問箱...page 38
- 11。安部公房の変形能力16：まとめ  
～安部公房の人生の見取り図と再帰的人間像～：岩田英哉...page 40
- 12。もぐら感覚19：様々と窪み：タクランケ...page 73
- 13。訂正箇所...page 91
- 14。読者からの感想...page 92
- 15。合評会...page 96
- 16。本誌の主な献呈送付先...page 96
- 17。本誌の収蔵機関...page 96
- 18。個人情報保護方針...page 96
- 19。編集方針...page 96
- 20。バックナンバー...page 96
- 21。編集者短信...page 97
- 22。編集後記...page 98
- 23。次号予告...page 98
- 24。もぐら通信執筆者別索引...page 99
- 25。第二版訂正箇所...page 108

お知らせ：電子媒体(PDF)で閲覧されている場合、ツールバーにページ数を入力して検索すると、恰もジャンプ・シューズを履いたかのように、そのページにジャンプします。

## 安部公房氏との打ち合わせ記録（1）

～「長与日記」より・NHK放送番組関連～

長与孝子

「安部公房氏との打ち合わせ記録」は、NHKラジオのディレクターであった長与孝子氏が、自身の日記から抽出してまとめられたものです。

長与氏は、安部公房のラジオドラマやこどもミュージカルの制作に尽くされました。

1	キッチン クッチュ ケッチュ	1957.6.3-21	(全集7)
2	おばあさんは魔法使い	1958.1.2	(全集8)
3	豚とこうもり傘とお化け	1958.12.31	(全集9)
4	ひげの生えたパイプ	1959.5.11-9.4	(全集10)
5	くぶりろんごすてなむい	1960.1.1	(全集11)
6	お化けの島	1960.12.25	(全集12)
7	時間しゅうぜんします	1962.1.2	(全集15) 他

長与孝子氏は、昨年2月2日に亡くなられており、従弟の中村武彦氏の高配により、本稿を本誌に掲載の運びとなりました。

なお、当時NHKは日比谷・愛宕山にあり、安部公房は1959年4月、調布市仙川に転居するまでは中野区野方に住んでいました。

(以下、長与日記の本文です。)

表記は人名以外は原文のままとしました。

1957年（昭和32年）

1月31日（木）

夕方5時頃、安部公房氏来局。放送（キッチュ・クッチュ・ケッチュ）を5月にのぼして欲しいとのこと。3月初めに、プロットをいただくことにして班長に相談の上、後処理。

3月18日（月）

安部氏と局にて打ち合わせ。主人公、蛸をやめて鼠にしたい由。海中の話しも面白いと思っていたので反対してみたが、蛸だとどうしても漫画の蛸の八ちゃんを想像してしまうのでイメージに合わない由。安部氏のプロットを提案会議に出したが、難解とのこと。もう一度練り直すこととなる。安部公房氏の作はプロットも、奇想天外だが、台詞にありきたりでない面白さがあると思うのだが誰もわかってくれない。6月の放送分に延ばす。

4月8日（月）

7時半に新宿の喫茶店、白十字で安部氏と会う。コーヒーを飲みながら話したが、うるさいので出て25時と言う松浦竹夫氏の叔母さんのやっているバーに行く。ハイボール2杯。その後、新宿西口の安部氏行きつけのバーでビールと焼き鳥、更にコマ劇場近くのシェ・ヌウと言うキャバレーでハイボールを飲みながら、1回目の初稿をみせていただいたが、構成にも工夫あり、更に会話はさすがに面白かった。その後は、ラジオドラマの話しは殆どせず、日本人はユーモアが判らず、観念的レッテル主義、ナンセンスの有効性、コメディ論など。ダンスをしてフランスに行かれた話しを聞く。独身女性とは話しにくい由、私がもっと若いと思われていたことなど。12時半すぎ、別れて電車で帰る。

4月10日（水）

夕方、安部公房氏について課長に聞きに行く。課長曰く「この件については以前から班長に伝えてあったのだが、安部さんは共産党員だから止めるように。なぜ安部さんにしたのか、他に作家もいるのに。春には筍しか食べてはいけないことはないだろう」私はあきれた。しかも、一昨日安部氏に伺ったところでは、自分は共産党員ではないこと、むしろハンガリー問題で共産党から睨まれている立場だとのことだった。私は安部氏が嘘をつく人ではないと思う。進歩的な人は当然左翼的であり、左翼的即共産党員と短絡するのが日本人の悪癖、等質性だと思う。この上は徹底的にレジスタンスと行こう。

4月11日（木）

朝、共同通信に行き、岩永さん、長与道夫さんに会って、特信部から警視庁への調査依頼。母から電話あり。犬養健より国家公安委員会に問い合わせたところ、安部公房氏は、新日本文学会の常任監査役をしていたので、党員と思われ易いが、あれは推薦によるもので、党とは関係ない旨知らせて来る。岩永さんからも電話あり。安部氏は正式党員でも秘密党員でもないとしている由。早速課長に抗議しようと思ったが、周囲から止められて断念。レジスタンスのためのレジスタンスにならないよう巧妙にやるべきだろう。それにしても、私の調査結果を聞いたら、上層部も困るだろうと可笑しくなった。

4月16日（火）

安部氏の依頼で、王子の東京書籍へ教科書を取りに行く。購入目的を話したら、小学5、6年用の教科書16冊くれた。原稿が完成したら見せてほしい、もしかしたら教科書に取り入れたいとのこと。

7時1分新宿白十字に教科書届ける。新潮社のクイズについてしばし歓談。ここを出て静かな場所を探してぶらつく。安部氏は飲みたい由。樽平の二階にあがる。第一回の三稿目の原稿を読む。鼠が話せるようになる説明がつまらないと言ったら、カットする由。もっとデフォルメしようと言合。そこへ梅崎春生氏がやってきて安部氏にからむ。安部氏が少し刺激したら、怒って私に握手してまもなく帰る。安部氏この後ひどく酔う。彼は梅崎氏が嫌いの由。中間小説に走ってそれを意識しているので、そこをつつかれると大変気にするとのこと。安部氏曰く、獅子文六の作品などはやはり芸術だ、三島由紀夫の方が梅崎よりまだいい。うんとやっつけなかったのがしゃくにさわる。と言ってぐいぐい飲む。赤い顔が醒めてきたと思ったらその方が酔っている由。でもこれ以上は酔わないそうだ。

10時半に樽平を出てコマ劇場のそばのエロイカへ。スタンドでハイボール。本物の芸術を理解できない人間が多くて困ると言ったら、安部氏に言われた。歴史を見れば、社会は進歩して行くのがわかる。封建社会だって、その当時には変わるとは思っていない人が多かっただろう。でも今は変わった。未来に希望を持つこと、歴史を信じること、それ以外に希望はない。そして今のようにいやな所に居て、内部から改革してゆくと言う仕事を持っていることを喜んでいいのだ。自分に自信を持つこと。それに生活は大事にしなくてはならない。(多分私がNHKなどやめたいと言った為か)生活を守れない人に本当の仕事は出来ない。但

し、作家と言うものは、こう言う社会では、生活だけを考えていては、本当の仕事は出来ない。生活と仕事とは別のものではないのだ。しかし作家の場合は生活を考えると居られない。この点は逆だ。又、個人の意識が確立したのはごく新しいことなんだし、意識を持って居るのは人間だけなのだ。などという話しをする。

更に安部氏は言う。「でも本当は憂鬱さ、憂鬱だよ。我々の生きてるあいだに世の中がどれだけ進歩するか判らないのだから。でも、少しでもいい方へもってくようにする事は楽しいことさ。」

又、「歴史を考えると、僕はアメリカってのはいい国だと思う、いい所がある。チャップリンを育てたのはアメリカだ。初期のチャップリンはすばらしい。思想じゃなく、人間としてののかしみや、哀愁が出ている。絶望を知らないのは芸術家じゃあない」と。チャップリンが最近、思想的観念的に喜劇を作り出しているのは何故かと聞いたら、政治論に発展してよく判らなくなってしまった。原爆問題も、道徳問題にしているが、あれは政治問題の筈だと言う。カナダのノーマンが、アメリカの赤狩りに抗議しての自殺したことについても、人情的に同情しても意味がない。伊藤整が、都留氏は東洋的知恵、沈黙で対抗すべきだったと評したという話になり、現在の私も、沈黙で対抗すべきだろうか聞いた所、氏曰く、沈黙そのものがないのではない、ただ無意味な抵抗をしてもつまらない、相手より上から見て行けばいいんだとのこと。

安部公房氏この時三十三歳、歴史、社会、哲学に造詣深く、既に自立した思想の持ち主、しかも奇想天外の発想とユーモアに驚く。私が、歴史の未来を信じることは、理論では判っても感情がついてゆけないといったら、安部氏は、「それが本当だ、本当は僕だってそうだ。君は実にナイーブだ、そのナイーブさを今後も妥協せずに持ち続けてほしいんだ」と。午前 1時半になり車で帰る。

4月 17日 (水)

安部氏曰く、メキシコの「忘れられた人々」と言う映画は実にいい。なぜかと言うと、本当のリアリズムで、現実の厳しさを実に冷酷に描いているから。どこか三流の映画館にでもまわって来たら、是非見るようにと。こうした本物のリアリズムを経て、客観性も初めて地についたものとなる。単なる観念的喜劇や、現実の茶化し、風俗のユーモアでは本物ではないと言うわけだ。



4月21日(日)

文学座の松浦竹夫氏とシェークスピアのことで電話問い合わせ、その折氏曰く、この間、安部公房さんと25時(竹夫氏の叔母のバー)に来てくれた由。叔母がびっくりしていた。実は安部氏とは成城の先輩なのだがどうも苦手でね、あんまり話した事はしない、しかしとてもいい人らしいねとの事。

4月22日(月)

3時半頃、安部氏から電話、夜会議があるので、今会いたいよし。他の仕事は病欠とごまかしてNHKを脱出、4時過ぎ白十字着。直後、安部氏現れて「待った?」

「いいえ、今来たばかりです」コーヒーを飲みながら「鼠の話し」のプロットと、第一回、第二回原稿を読み題名を考える。安部氏曰く「『消えた銅像』と言うのは文学的すぎるかな」「やっぱりゴゴリ的で」「そうだな。」

「『キッチュ・クッチュ・ケッチュ』というのはどうでしょうか。提案文書にも一応そう書いておきましたから」「ハッハッハ実は僕もそう思っていたところだ」安部氏「どうも夕方になると、飲まないと安心できなくて頭がどうかなりそうになるんだ。ちょっと席を替えよう。まだ明るくて早いかな。そうでもないだろう。」そうなる子供みtainな人で、早速飛び出して近くのライオンビヤホールに入る。私は一杯、彼は二杯。ソーセージなど食べながら話される。「君はもう帰って寝るだけだからいいだろう。僕は7時から会があってね、人が集まる所は気を遣うからとても嫌なんだ。会の前はそわそわしちゃってよけい飲まなくちゃいられないんだ」

ここで、リアリズムの表現、芝居と小説の書き方の相違、小説から芝居に入った人の方がいいよだと言うこと。ストリンドベリーのものなどは小説になると筋がめちゃくちゃで、判らなくなる。プルーストのものなどは面白い、などという話しを聞いて、6時20分頃、駅で別れる。

夜、安部さんの原稿をもう一度読んでみたが、面白いけれど大変に難しい。配役を間違えたらお終いだと思う。

4月25日(木)

4時頃安部氏より電話あり。今ドイツ映画「枯れ葉」の試写会が終わったところだが、雨が降ってきて傘が無いので新橋まで出て来ないかとのこと。マイアミで待ち合わせる。「キッチュ・クッチュ・ケッチュ」の第一回が少しもたれると言

う話しをして、配役はブン子に山本安英、その他にも千田是也、宇野重吉などにも出てもらおうと言う話し。5時過ぎ、マイアミを出て、バスで新宿へ。今夜の会には少し早いとのことでバー25時に寄るが、まだ開店していないので新宿駅にて別れる。

5月4日(土)

明日の産経ホールでの舞台の準備の間を縫って、野方の安部公房氏宅へ教科書を届ける。理科のだけ持参しなかったので、夫人が「今の文部省はだめだと怒ってます」と言われたので、これは私の不注意であることを説明。あまりに犬が吠えるので中に入れない。

5月11日(土)

夕方、安部氏より電話。白十字で原稿二本。バー25時へ行く。この前ここに来た時は酔っていたと話したら氏曰く「へえ君でも? そんなこと言って居なかったけど。今度ひとつ酔っているところを見せてもらいたいなあ。」いつも緊張しているから、そうは行かない。

5月13日(月)

「キッチュ・クッチュ・ケッチュ」収録のため、スタジオをおさえる。

5月15日(水)

他番組収録中に安部氏来局。かねて頼まれていたので、「NHK新聞」の奥田氏に連絡、一階の休憩室で安部氏の写真撮影と今度のドラマのねらいについてのインタビューを行う事とする。

5月21日(月)

午後8時頃、安部氏より電話。白十字で待ち合わせ、第3、第4回の原稿いただく。配役その他打ち合わせ。9時から用があると言いながら、12時過ぎまで潤で飲み話す。

5月22日(水)

午後8時半頃、文学界の座談会が終わる由なので、安部氏に来局依頼。入野氏の車で新宿へ。狭い所に駐車するので入野氏大騒ぎ。安部氏も何かと口を出す。

初対面とは思われない。樽平の二階で作曲打ち合わせ。入野氏、早速8月に軽井沢で行われる現代作曲家の夕べに安部さんの出席を請う。

台本の打ち合わせのあと、戦後の話しから猫を食べる話しまで。11時頃駅で別れる。

5月23日（水）

配役打ち合わせ。ブン子に中島そのみ（当時ハスキーヴォイスの歌手として売り出し中）鼠たちに、田中明夫、逗子とんぼ、島田三郎。

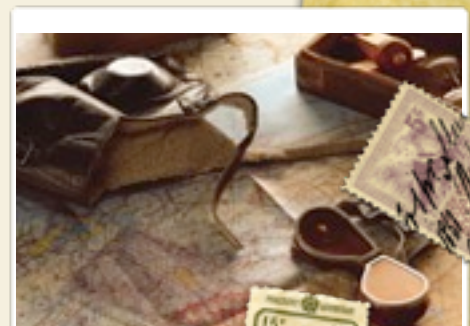
朝日新聞と毎日新聞が、安部公房初の連続ドラマについて取材に来る。

5月25日（土）

チーフの中村文雄氏と作曲の入野義郎氏宅へ譜面とりに行く。二本目の歌譜は後ということで、4時、仙川の桐朋学園へ。帰り、桐朋音楽学校長の吉田某氏を送ることになる。車の中で氏曰く。「安部公房と入野義郎とは妙な取合わせだ。NHKでよく許したな」と。

帰局後、急いで写譜を頼み、夜、歌譜は俳優に送り、効果さんやミキサーに連絡。

（続く）



*Rhuncus tembor blacera!*



## うずめ劇場、ゲスナー氏へのインタビュー

編集部・岩田英哉

2014年1月18日（土）に、うずめ劇場を主宰するペーター・ゲスナー氏の稽古場を訪ね、2月7日に初演を迎える『砂女』（<http://test.uzumenet.com/suna/>）の稽古の様子を拝見し、その後1時間弱のインタビューを日本語で行いましたので、読者のあなたにそのレポートをお届けします。

岩田：ゲスナーさんが日本にいらした経緯をお話下さい。

ゲスナー：1989年11月にベルリンの壁が崩壊して、それまでの東ドイツは外国へは行くことのできる国ではありませんでしたので、外国へ行きたいと妻もわたしもとても強く思っていました。そのとき九州工業大学で先生の募集があり、妻が応募をしたところ招聘されましたので、わたしも一緒について来たということなのです。

それが、1992年です。

それまでは、ライプツィヒ大学で、演劇史を専門に勉強していました。同時に、役者もやっておりました。

岩田：日本にいらして、なにをなさったのでしょうか。

ゲスナー：日本に来て、3年間は、黒テントの資料を読み、日本の戦後の演劇を研究しました。黒テントとドイツは縁があって、それは、黒テントがブレヒトをやったからです。

そうして、その黒テントなどのアングラ演劇のはやった1970年代には、Davis Goodmannというユダヤ系のアメリカ人がいて、このひとが非常に日本語の達人な方で、当時の演劇状況を『Concerns Theater Japan』という英語の雑誌にして発行していましたので、これを読んで日本の演劇に詳しくなったというわけです。

そうして、考えてみて、わたしの好きな劇作家は、やはり唐十郎、佐藤信（まこと）、秋元松代です。特に、余り有名ではありませんが、女性の劇作家として、秋元松代は素晴らしいと思います。わたしの非常に好きな作家です。

そうして、このようなことを勉強しながら、その間ライブツィッヒ大学のための論文も執筆しました。

岩田：何故、安部公房なのでしょう。

ゲスナー：安部公房を読んだのは、14歳のときでした。わたしの母が安部公房の『砂の女』を持っていて、母の書棚にそれを見つけ、そうして、それを読んで以来、安部公房が好きです。当時は14歳でしたし、男女のエロティックな場面があって、それを読むのが驚きでもあり、何か隠れるように読んだ記憶があります。しかし、そこに書かれていた安部公房の問題意識に共感しました。

岩田：そうして、日本にいらして、何故こうやって日本で演劇活動を20年もなさって来たのでしょうか。

ゲスナー：本当に何故かは説明が難しい、自分にも解りません。しかし、当時3年が経つ頃に、この先をどうしようかと考えました。ドイツに帰国するか、それともどうするかという選択でしたが、わたしはやはり演劇に生きることを選択しました。研究だけではなく、実際に演劇をやってみなければいけないと考えたのです。

最初は幾つかの劇団に当たって、入団して活動をしようと思いましたが、どれもうまく行きませんでした。そこで、それでは、自分で劇団を作ろうと思い、それで作ったのが、うずめ劇団なのです。

岩田：このうずめ劇団という名前の由来を教えてください。

ゲスナー：九州は神話の国ですから、天の岩戸の前で踊って、天照大神に岩戸の戸を明けさせた、あの、あめのうずめという女性の神様の持つエネルギーを借りて、その力を備えた劇団を願ったからです。エネルギーというのは、陰陽ふたつあって、そのバランスの上で物事が展開しますから、そのような力を授かるという意味を籠めました。

岩田：その後の展開はどのようなことになりましたか。

ゲスナー：鈴木忠志さんという演劇家に声を掛けられて、富山県の利賀村での演劇フェスティバルに出ないかと言われました。最初はそれほど乗り気ではなかったのですが、一等賞が300万円、二等賞は米80キロという賞品で、役者たちには、二等賞の米俵を狙おうとって参加しましたが、何と一等賞を貰いました。

参加団体が、66団体、それを25団体に絞り込み、それからさらに6団体を選んでの受賞ということでした。

そのあとは、セゾンからも助成金を戴き、また鈴木さんの利賀村でのフェスティバルにも参加したり、その間朝日新聞には、上演した『今際（いまわ）の際（きわ）』という演題が、年間ベスト3に選ばれたりということがありました。

2010年には、読売新聞にもベスト6に選ばれました。

話が前後しますが、2004年に、桐朋学園大学の学長をなさっていた蜷川幸雄さんに招聘されて桐朋学園大学に奉職して、演劇を教えることになりました。

2007年には、調布市の、安藤忠雄さんの設計したせんがわ劇場の藝術監督に就任し、箱はできても中身（ソフトウェア）がないというので、プログラムをつくる仕事を頼まれました。この仕事を5年間やりました。

そうして、2011年に、せんがわ劇場の仕事が終わってから、もういちどずつめ劇団を立ち上げようと思い、今日に至っています。今回の上演が第26回目の公演になります。

岩田：何故『砂の女』なのでしょう。

ゲスナー：既に言いましたが、14歳のときにこの作品を読んで以来ずっと上演したい、やってみたいと思っていたのです。勅使河原宏監督の『砂の女』も東ドイツで観ました。

でも、映画の中では男女のラブ・ストーリーになっていて、小説はそうではないと思っていました。確かに、あの男優は演技も上手ですけども、どこまでも男優は変わらず、いつも一定の演技をしています。しかし、小説を読むと全然そうじゃありません。小説の中では、男は物凄く苛められているわけで、そうした中で非常に変化をして行くわけです。だから、そのような男を演出したいと思いました。

更にもうひとつ重要なことは、福島のある大変な災害の後では、それまでの時代は個人ばかりのことを考える時代であったと思います、つまり映画のように男と女の個人同士の話です。しかし、福島以後は、そうではなくて、皆が何をどう考えるかということを考える時代に大きく変化したのだと考えています。

岩田：確かに、稽古場の演出でおっしゃっていたことは、そのことでしたね。男が教師であって、社会の秩序や法律を守るべき人間としての演技を要求し、同時に村人に向かって叫ぶときには、お前にも罪があるのだと叫ぶ。しかし、その叫びは直接的な感情的なものではなくて、それでは駄目で、ゲスナーさんはオタクという言葉で、主人公の男の感情を役者に説明していましたが、自分というものも内向的に考えていて、孤立していて孤独であって、そうして同時に法律という社会的な規範の大切さも主張する。そのせめぎ合いにある男を演技することを役者に要求なさっていらっしやいました。ゲスナー：ええ、そうなのです。福島以後には、砂の女という名前は、津波の女であり、雪の女であり、水の女である。どれも、この女という言葉を使えば、みな死の女というイメージになると思います。

死一女という繋がり、連想ですね。この女は、自然の力、自然のパワーのイメージです。

この意味で、この安部公房の『砂の女』という作品は、非常に福島と関係が深いと思いますし、安部公房という作家の問題意識は、今も生きているのです。

岩田：小説から脚本を起こしたとウェブサイトには書いてありましたが、それはどのようになされたのですか。

ゲスナー：荒牧（男を演じる男優）と後藤（女を演じる女優）を中心に、それから藤沢さんという方にも力を借りて、1年以上を掛けて脚本をつくり込みました。

これは、急ぐのではなく、じっくりと時間を掛けることに意義があると思って、そうした時間をわざわざかけたのです。

岩田：砂女に、砂男を持って来ましたが、これは一体どういう経緯なのでしょう。

ゲスナー：遊び心です。砂の女でもっと自然のイメージに出逢っておりますから、これに対して、砂男の場合は、主人公の男の惚れる相手が機械人形の美女ということで、対照的に、先ほどもいいましたが、陰陽というか、プラスとマイナスというように、エネルギーの均衡を考えて、これがいいのではないかと思ったのです。砂男の演出は天野天街さんが行います。

歌は、UAさんという歌手が作曲する『今日』という題の歌です。

E. T. A. ホフマンの『砂男』は、唐十郎さんが若い時分から好きな作品で、大事にしている作品です。天野さんの演出は、少し唐十郎に似たところがあります。

岩田：最後にもぐら通信の読者に一言、来場その他の期待の言葉を戴ければありがたく存じます。

ゲスナー：わたしは日本に来て20年間日本に住んで何のことを何を一番なすべきか、どの劇作家が大事かと問われれば、それは正直、安部公房だと思っています。

彼の書いたことは、驚く程現代に生きています。20年日本に住んで、今日述べたような自分の生命に対する考え方からも、その考えも含めて、安部公房の書いたことは正しいと思っています。

岩田：そうですか、今日は、どうもありがとうございました。確かに読者にその言葉を届けたいと思います。最後に公演の成功をお祈り致します。





## もぐら通信、池田龍雄先生に会いに行く

wlallen/岡田裕志

○wlallenの記

去る1月11日（土）、大阪の阪急梅田駅（JR大阪駅）付近のnoon cafeにて、池田龍雄先生の講演会「池田龍雄 箱の中で……ア」が開催されました。先生にお会いするまたとない機会ですので、私wlallenと岡田の両名が拝聴してきました。ホールの最前列に、二人が陣取って、お話を聞かせていただきました。

冒頭に「よくわからないと思いますが、まず映画を観てください」といったようなことを言われました。海の映像が流れて、その次に黒子の衣装を被った男が、梵天の塔（ハノイの塔）に挑戦する映画が10分程流されました。その後講演が始まり、池田先生は、「梵天の塔に挑戦しているが、これが完成できない。宇宙の年齢137億年よりも時間がかかってしまう」とのこと。でも、何かの催しで、3時間ぶっ通しで挑戦されたこともあるとのこと。また、ある学者がその光景を見て、「餓死するには、もってこいだな（笑）」と。完成できないものに、敢えて挑戦するところに、芸術家の営みを感じました。

講演後の懇親会で、軽食をつまみながら、

「黒子は池田先生なのですか？」とお聞きしたら、

「そうです」と

「黒子にならないといけないのですか」

「いけないわけではないのですが、無人称になりたいのです」

このあたり、安部文学の匿名性と通じるところがあるのかもしれませんが。

私は、絵画のことは全く分かりませんが、先生の話は、現代物理学を引き合いに出すなど、とても科学的でわかりやすいものでした。

「ビッグバンで、今の宇宙ができた。」

でも、何故、無から有が生じるのか、それを説明できる人はいないなどなど。道元の言葉を引き合いに出されていましたが、現代宇宙論は禅問答の世界と通じるところがあるのではないかと思いました。その他、自然科学に非常に通じておられるのに、ビックリしました。

小説家になりたいと思ったけれど、どうすればなれるのかがわからなかった。とりあえず、多摩美（多摩美術学校）に入って、画家の道を進んだとのこ

と。しかし、入学したものの、半年で行くのがバカらしくなったそうです。また、指導教官に絵を見せたら、「こんな絵描くなんて、生意気だ。評価できない。」と言われて、0点をもらったそうです。

戦争の時は、航空隊に属していたそうです。終戦の時は、生き延びたことよりも、敵をやっつけられなくて無念の思い出で一杯だったそうです。しかし、後に、間違った戦争であることが分かり、ショックを受けたそうです。

また、安部公房と同じく、オリンピックが嫌いだと仰っていました。スポーツは、本来健康のためにするもの。争うものは好きではないと。

「プロメテウスのウンコ」（後に「プロメテウスの遺物」と改題）という先生の絵画を観せてもらいました。これは、福島原発事故の問題をえぐりだしていました。最終廃棄物を処分する方法を先延ばしにしたまま、原発を運転をし続けてきた人類が、ウンコ（廃棄物）に苦しめられる番が来たのです。

2次会の居酒屋では、なんと池田先生の隣席に座ってしまいました。安部公房さんとの思い出話などを話して頂いて、非常にありがたかったです。安部の死後、東京の仙川で個展を開いたあとに、真知夫人に会いに行こうとしたが、ある美術評論家とぼったり出会い、行けなかったとのこと。後で聞くと、そもそも、その日に夫人は死亡していて、会いたくても会えなかったのだと。

「夜の会」や「アヴァンギャルド芸術研究会」の話も聞かせていただきました。絵画の部会でも、文学の方が議論を進めていくので、嫌気がさし、去って行かれたそうです。

池田先生は、明るくてフレンドリーで気さくな先生でした。とても80代とは思えぬ、エネルギッシュな方でした。気づいたら、22:30で終電の時間でした。帰るのが、とても名残惜しかったです。今、先生の著書「蜻蛉の夢」を少しずつ読んでいます。

なお、西日本新聞の記者の方も同行されていて、4月から池田先生についての記事を連載されると聞いております。

### ○岡田裕志の記

池田龍雄先生とのお付き合いは「もぐら通信」創刊から始まっています。献呈先のリストアップをした際、「アヴァンギャルド芸術研究会」以来の縁り、ということで池田先生にもお送りすることにし、インターネットをされないであ

ろう先生への送付を私が担当することになりました。

3号をお送りした後、一昨年(2011年)の12月になりますが、先生からお葉書をいただきました。

「もぐら通信」(3号)有難うございました。

僕が安部さんに初めて会ったのは二十歳になったばかりの、昭和23年秋でしたが、たちまち、彼のファンになりました。特に初期のものは殆んど読んでいます。交友も、親密だったので、その頃書いたもので「安部公房異聞」とした小説風な人物スケッチがあります。だいぶ時間が経っておしまいの方数枚が欠けたまま、ワープロで打ち直した状態ですが、よろしかったら送りましょうか。(後略)

このお申し出に欣喜しまして、原稿をお送りいただき、掲載させていただきました。以来、今号巻末の「執筆者別索引」を見ますと、4篇の原稿を掲載させていただいています。先生はこのお葉書に見られるように、いつも優しいお心遣いをして下さり、たいへんお世話になってまいりました。そして昨年5月に東京へ行く機会があった時には、銀座での個展を拝見しましたが、残念ながらその時は先生にお会いできませんでした。それで便せんを買ってきてぎっしり拙い感想を書き、託したのでした。

そんなわけで、大阪で池田先生の講演会がある、と聞いた時には大喜びで、仕事の休みを替わってもらい駆けつけたのです。会場は50人ほどの席があるということでしたが、若い方も多く、中には私より年配の男性や女性もおられてまことに多彩で、満席に近い様子でした。wallenさんと一緒になって、先生のお話を聞くうち、いろいろな想念が次々湧き起こるのを感じました。初めの映画「梵天」では塔を積む無限の時間、いや無限に見えて実は有限の、永い時間に過ぎない、人間の時間はさらに短い有限であるが、積んでいる黒衣の人のうちには単純な動作の繰り返しのうちに、無限の時間が流れているに違いない。

と。  
先生は美術家ですが、「世紀の会」などでジャンルを超えた活動に触れられ、文章もよくされることが頭にあり、この日、私はいつになく先生の言葉を文学から考えようとしていたのです。ビッグバンで宇宙が膨張するお話しの時には、ポオの『ユリイカ』を想起しました。文学者でありながら、ポオは宇宙の

成り立ちについて考え、星団が「一点」からの「放射」の位置にあること、そしてそのことから宇宙が「膨張」していることを導き出しています。ビッグバン理論もないころのことです（1848年）。先生も芸術家でありながら宇宙にまで想いを広げ、ご自身が悠久の時間を体現されているように思いました。私は難聴で、聞き取れないところも多かったのですが、熱心に聞くうちに先生も私たち二人に向かって話しかけて来られるように感じられました。

そうしてお話が進むうち、司会の方（主宰者の藤澤顕子さん）が先生に声をかけられた時にはあっという間の2時間が経っていたのです。あとは懇親会の予定ですが、それまでにいくつもの質問を抱えていた私は、ここぞと声を上げました。質問の内容は「時間については安部公房も触れていますが、時間を表現するのに、文学と絵画ではどのような得失がありますか」というもので、「文学では時間を追って順に書いていくことが出来るが、絵画ではそのようにはいかない。」というお答えでした。私は、確かに絵画での時間を言葉で表現することは難しい、でも先生の絵には確かに時間の流れを感じ取れるものがある、それをテーマにした絵もあったはずだと心のうちで思い、そのような見方でまた先生の絵を見直してみよう、と思いました。

懇親会が始まると、ざわめきの合間を縫って先生にまた質問をしてみました。

「安部公房が絶賛した先生の「網元」の絵は社会的な状況が表現されていますが、現在の、原発問題や特定秘密保護法が問題になるときに、先生がそれらを描かれたらどんなものになるのでしょうか。」それに対して「それは常に頭にある。」とおっしゃいました。そして傍におられた藤澤さんがスマホの絵の中から「プロメテウスの遺物」を見せて下さいました。これが原発問題に対する作品だということです。



### 場の位相Ⅴ

危場——プロメテウスのウンコ——〈牙

巨人プロメテウスは、天（太陽）の火を盗んだ罪で鎖につながれ鷹に腸を抉られる罰を受けた。

これは、そのとき彼が、苦し紛れにひりだした巨大な排泄物だ。贖罪の副産物。栄養＝エネルギーたっぷりで、人類への有益な贈り物だというふれこみだがとんでもない、それどころか迷惑至極、危険この上なき代物である。

件のウンコはたちまち腐敗、崩壊、<sup>ハルゲン</sup>溶融し、流れだしたその強烈な毒気——すなわち無数の放射線——によって、人々は死の苦みを受けることになった。

昔のギリシャの神話ではない、今の日本の現実である。

——地底から聞こえてくる犠牲者の悲痛な声——  
“早く！ 早く片付けてくれ、この醜悪厄介な危険物を、早く！”

まだ流れている「梵天」の映像の前で「最後の積み上げられた梵天の像は墓標ですね。あれは誰への？」と申しますと「人類への。」とお答えでした。「黒衣の人が道路で積み上げているところではベルイマンの「第七の封印」での死神と騎士がチェスをしている場面を思い出しました。」には「ああ、同じですね。」とおっしゃっていただきました。

池田先生にお聞きしたかったことに「私たちは自ずと美しいものを求め勝ちですが、先生の絵は必ずしもそうではありません。先生にとっての美とはどういうものですか」「また私たちの美を求める気持ちは、何かの妨げになっているのではないのでしょうか。」「写真を撮る時にも、構図を考え、シャッターチャンスを待ちます。先生の絵にも構図があるはずです。このような心も、ある種の美を求めていることにならないのでしょうか」「もしそうだとすると、文学においても、たとえば安部公房が文を書き換え書き直すことも、美を求めていることと共通の心があることにならないのでしょうか。」

まだまだたくさんの質問を抱えたまま、二次会の席に移っていったのでした。この集いを企画されお世話下さった藤澤颯子さんと山田久美子さんに厚くお礼を申し上げます。



## 東京・安部公房・パーティー『方舟さくら丸』読書会報告 ～方舟はいまだ発進せず？～

ホッタタカシ

安部公房ファンの紳士淑女が集う「東京・安部公房・パーティー」（通称TAP）では、定期的に読書会を行っています。

さる12月21日には、『方舟さくら丸』の読書会が開催されました。この日のレポートを通じて、TAP読書会がどのように進行するか解説しましょう。将来の参加を検討している方、「最近よく聞く“読書会”ってどんなものだろう？」と考えている方の一助になればと思います。

課題本は、基本的に参加者の投票によって決められます。9月に行われた『無関係な死・時の崖』読書会の最後に、現在流通する安部公房作品の中から、次回の読書会の課題本にしたいものの投票を行ないました。その結果、最多得票だったのが『第四間氷期』と『方舟さくら丸』。決選投票により、『方舟さくら丸』が選出されました。1984年発表、安部公房晩年の代表作です。

会場となるライブハウス「荻窪ベルベットサン」で読書会を行うのは、今回で3度目。モダンジャズのライブや、文芸関連のトークショーなど、連日魅力的なイベントを行っているお店です。昨年のお話作『石原慎太郎を読んでみた』（栗原裕一郎&豊崎由美）は、ベルベットサンで一年間に渡って月一で行われたトークライブを書籍化したものなのですよ。

会場はUstreamによる中継システムも整っているため、読書会は毎回インターネットで配信しています。遠距離で来場が難しい方は、こちらの配信を見ながら、コメントを書き込んだり、あるいはtwitterのハッシュタグで参加してもらうことも可能です。

さて、開場時間を迎え、参加者がぞくぞくと入場してきます。参加者は受付と同時に、用意された「作品概要（あらすじと登場人物をまとめたもの）」を受け取り、ハガキ大の「名刺」に名前を書いて体の一部につけます。書き込む名前は、本名でも、SNSのハンドルネームでも、この場かぎりの偽名でもなんでもけっこう。これは、10人を越える人数で議論を行う場合、それぞれの意見の発言主を明確にしたほうが進行しやすいためですが、同時にこの空間に「参加」する意識を強める演出の意味もあります。「名づける」という行為に終始

こだわり続けた安部公房を解説するための、ひとつのステップとでも申しませうか。後日、この名刺がみなさんの会社や学校で自分の席に座っている……なんてS・カルマ氏的な事態が起きるやもしれません。

ちなみに今回の客入れ音楽はピンク・フロイド『ザ・ウォール』ライブ盤のDisc2。山口果林『安部公房とわたし』によると、フロイドファンの安部公房は『方舟さくら丸』執筆中の1983年、映画化された『ピンク・フロイド／ザ・ウォール』（監督アラン・パーカー）を観に、わざわざ映画館に出向いたそうです。『ザ・ウォール』は心にレンガの「壁」を築いて自閉してゆくミュージシャンの葛藤を描くロック・オペラですが、石の壁に囲まれながら、自らの王国の「国民」を選ぼうとして失敗する男を描く『方舟さくら丸』と、どこかで共鳴している気がしてなりません。

今回の参加者は総勢14名。大学生もいれば、60代の「もぐら通信」編集部員（タクランケさん）もいるという多彩な顔ぶれ。年末の忙しい時期にもかかわらず、多くのファンに集まっていただきました。

読書会の進行方法は、開催団体によってさまざまで、決まったスタイルはありません。有志による研究発表をまず行うところがあれば、それぞれ意見内容をまとめたレジュメを準備し、全員で交換して読むところもあります。

TAP読書会は「なんとなくフラッと……」訪れた方でも参加できる、誰でも発言方式。第一部では、参加者が順番に自己紹介しながら、自分は『方舟さくら丸』をどう読んだか、率直な感想を5分弱で語っていただきます。発表時にリアルタイムで読んだ年季の行ったファンから、この作品は今回初読、いや安部公房の長篇はこれが初めてです、という人までそれぞれの『方舟さくら丸』体験が一気に語られてゆきます。

どんな声が挙がったか、いくつか紹介しましょう。

- ・ 「核」のテーマ性を強く感じ、黒澤明の映画『夢』の一エピソード「赤富士」を思い出した。
- ・ 『砂の女』に共通するイメージを強く感じた。どちらも昆虫を入口に、穴ぐらに潜り込む話。
- ・ 「方舟」のイメージについて、初期短篇『ノアの方舟』と比較すると面白いのでは。



- ・ フレイザー言うところの「王殺し」の物語の変奏として読めるのではないかと思った。権力者（主人公）が権力を剥奪され、新たな秩序が生み出される物語。
- ・ 旧作にくらべ、言葉が過剰で安易になった気がする。ワープロ使用の弊害ではないか。
- ・ 登場人物が少なく、会話が多いため戯曲みたいな印象を受けた。
- ・ 執筆中の題名は『志願囚人』。長年、ジャンルを越えて身軽に活躍してきた安部公房が、世の中に閉塞を感じ始めた心情が如実にうかがえる。
- ・ 執筆直前の1977年にはミシェル・フーコー『監獄の誕生』が訳出されている。「採石場に築かれる国家」というひとつの監獄システムのとらえ方をめぐって、参照している部分があるのでは？
- ・ 旧作にくらべてずいぶん平易で読みやすい。が、結末部にくると途中で放り出された感も強い。どう受け止めればいいのか？
- ・ 「サクラの男女」のキャラクターが気にかかる。どちらも平面的。とくに女にはほとんど人間性が感じられないし……。
- ・ 当時読んで失望し、改めて読んでダメだった。ワープロと戯れることでどうにか完成させられた印象で推敲が足らんのでは。
- ・ この時期の安部公房は、小説よりも対談／インタビュー／エッセイが面白い印象。しかし再読して、ひきこもり・ネット中毒者の心理小説としても読め、非モテ男の女性との接近を描く「童貞小説」としてスリリングに感じた。
- ・ 世界に類を見ない「トイレ小説」として非常に面白く読んだ。便器を中心に展開する閉鎖系のSFとしても評価できるのでは。

- ・ 作品世界には「死」と「性」が隣接して設計されている。主人公も含め、核戦争という概念的な死におびえる人物が右往左往する中、（癌を患っているらしい）サクラの男女だけがリアルな死に向き合っている。
- ・ ティム・オブライエン『ニュークリア・エイジ』（核戦争におびえる男が、庭にシェルター用の穴を掘り続ける話。1985年発表）とのイメージの共振性について。
- ・ 「もぐら」を自称する主人公が、最後に地上に出てくる瞬間の解放感がすばらしいと思った。
- ・ なぜサクラの男女は地下に残る決断をしたのだろうか？
- ・ 「生き残るための切符」を渡すに値する人物を探す主人公。このイメージは安部公房がかつて愛読したリルケ『マルテの手記』における、主人公が図書館のホールで、大衆が「自分の世界」に入ってくるには入場券が必要だ、と夢想する箇所を強く想起させる。安部公房としては無意識だったろうが、若年期の思索が一貫している証拠と見た。

などなどなど、このような意見が次々と飛び出します。安部公房ファンの集いだからと言って、鼻眞の引き倒しに徹するわけではありません。それぞれにとっての「安部公房像」にもとづく作品評価をまずは正直にぶつけあい、おたがいにあって「同意できる部分」、「差異を感じる部分」を発見するところが出発点です。

そして休憩をはさんで第2部開始。第1部で出た意見をもとに、参加者それぞれが気になった観点、キーワードについて、掘り下げた議論を戦わせます。

『方舟さくら丸』が発表された1984年の日本は、経済的にはバブル期直前の好景気を迎つつ、政治的には米ソの冷戦対立が続き、いつ最終核戦争が始まるかわからない、という不安を誰もが抱えていた状況。そんな中で1982年、中野孝次ら有志が「文学者の反核声明」アピールを発表し、「核状況下の文学」という言葉が文壇に流行していました。そのせいか『方舟さくら丸』はいささか

テーマ先行で読まれて来た印象が強い作品です。2011年の震災と原発事故によって、「核」の恐怖と「生き残り（サバイバル）」というテーマを改めてなまなましく突きつけられたわれわれですから、これらのテーマを中心に作品を解説しようとする人が出てくるかと思いましたが、意外やそういう声は目立ちませんでした。むしろ今回の参加者が関心を示したテーマは、

- ①なぜ「便器」が重要な位置を占めるのか？
- ②昆虫「ユープケッチャ」とはなんだったのか？
- ③登場人物たちをどうとらえるべきか？

といった、小説の「設計」に関する部分でした。①については、登場する「便器」とは「なんでも吸い込む機械」であり、そもそも便器なのかどうかすらよくわからない物体です。しかし、主人公の人生においては、重要な意味を持っています。主人公は、子供のころに父親・猪突によって、地下採石場の巨大便器のそばに縛り付けられる折檻を受け、その時のストレスが原因で体が肥満してしまいます。そういう過去を持つ主人公が、改めて左足をその便器に突っ込み、動けなくなってしまうのはなぜなのか？ こうした“イメージの反復”に注意してみると、『方舟さくら丸』という小説は冒頭、主人公が市庁舎の窓ガラスに映った自分の姿を見るところから始まり、最後に地下から脱出した主人公が、改めて同じ窓ガラスに映った自分の姿に気づくところで終る構成となっています。安部が得意とする「メビウスの輪」構造ですね。この時、主人公の目に映った自分の姿から見えたものはなんだったのでしょうか？ あらゆるものを吸い込み、下水から海につながっている、開かれた装置のはずの便器がつねに主人公をしぼりつけ、本来閉じた装置であるべき「ロッカー」が、最終的に主人公を脱出に向かわせる、という某氏の着眼はユニークでした。ロッカーが現実世界への脱出坑につながっている皮肉（『ナルニア国物語』の裏返しみたいだ）。脱出に向かう地下道はもぐらにとっての「産道」であり、最後の地上への帰還は「胎内からの生まれ直し」を意味する、という見方が成り立ちます。ラストシーンの主人公は、「ぼくのかんがえたさいきょうの国家」を作りたい、という子供っぽい願望から解放された現代人のあるべき姿だったのでしょうか？

②については、ユープケッチャのイメージ、自己完結した完全生物としての昆虫そのものが、安部公房にとっての「神」なのでは、という某氏の読みは面白かったですね。もちろん安部は無神論者でしょうが、このユープケッチャと

いう「神」の存在が、作品全体にちらつくあたりに、某氏はドストエフスキー的な匂いを感じたそうです。

主人公は自己完結するユープケッチャに自分自身を見出し、心惹かれるのですが、ユープケッチャが交尾の時以外は他者を必要しない一方、主人公は「仲間」を求めて切符を渡すに値する人物を「選別」しようとする点が決定的にちがいます。ユープケッチャはやすやすと交尾に成功し、無難に繁殖しているのに対し、主人公は仲間も恋人も得られぬまま共同体から追い出される羽目に陥ってしまう、この落差。しかし「ユープケッチャ」とは、そもそも昆虫屋がでっちあげた詐欺商品の気配が濃厚です。安部公房はこれまで、数々の「詐欺」を描いてきました。ユープケッチャとは、『どれい狩り』のウェーや、『快速船』の万能薬ピュー、『幽霊はここにいる』の幽霊たちの末裔であり、いずれにせよ現実世界を照射する補助線のひとつであることは確かでしょう。

③のそれぞれのキャラクターについては、主人公はけっこう手先が器用で活動的、ちゃんと事業もしている人物なので、簡単に現代の「ひきこもり」との類似をあてはめてよいものか、という意見や、父親・猪突は本当に死んだのだろうか、なぜ彼の死体はビニールシートにくるまれたままで、「父の不在」が続くのか、という意見、サクラの男女がそれぞれのパートナーを「末期癌」と主人公に告げるのはどちらも本当のことで、だから地下に残ったのだろうか、いやそもそもあの二人は「幽霊」だったのではないか……などなど、抽象性の高い各キャラクターについて、それぞれの視点から多彩な読み解きがなされ、気づけばすでに終了時間となっていました。

この読書会を映像で観てみたい方は、こちらのアドレス (<http://www.ustream.tv/recorded/41938499>) にアクセスしてください。過去の読書会の録画が保存されています。

読書会とは、テキストを大勢で読むことで、個人で楽しんだ部分を共有し、また自分一人では気づけなかった見方や解釈、さまざまな情報を教えてもらいながら、作品の「読み方」を鍛える楽しみです。筋書の面白さ以上に、作品にいくつもの企みが仕掛けられた多面体である安部公房作品は、その最適な素材と言えるでしょう。TAP読書会では、安部公房作品に参加者が自分なりのライトを当てる試みを行っています。はたしてそのライトは多面体の中で屈折し、どんな色を浮かび上がらせることでしょうか。興味を持たれた方は、ぜひ独自のライトを持ってご参加ください。

終了後、荻窪駅の近くの居酒屋で懇親会が開かれます。そこでは安部公房の話はもちろん、そこからほかの作家の小説や、映画、演劇、音楽、美術など、多岐に渡る話題が語られます。懇親会では、余興としてそれぞれが「安部公房作品以外でお薦めの作品」の発表を行います。安部公房ファンは趣味嗜好が共通する人が多いので、安部作品以外にも視線を向けるきっかけになれば、という狙いなのですが、この日は主宰のしめじさんも私も定例イベントをうっかり失念、開催の機会を逸したまま二次会終了となってしまいました。

しかたないので、9月に開催した『無関係な死・時の崖』読書会の参加者が挙げたものを、参考に紹介します。

足立巻一『やちまた』

ウラジミール・ソローキン『ロマン』

春日武彦『幸福論』

谷崎潤一郎『陰翳礼賛』

ホフマン『砂男』

マルセル・ベアリュ『水蜘蛛』

アラン・ロブ・グリエ『消しゴム』

多和田葉子『飛魂』

サーシャ・サコロフ『馬鹿たちの学校』

ステレオラブ『エンペラー・トマト・ケチャップ』 (CD)

太宰治『フォスフォレッセンス』

鷺田清一『顔の現象学』

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

オーソン・ウェルズ監督『審判』 (DVD)

次回は、3月下旬に開催する予定です。課題本は、前回の投票で『方舟さくら丸』と人気を二分した『第四間氷期』。みなさんの参加をお待ちしています。



## 大麻と箱男

柏木 静

[去る1月22日の安部公房の命日に、大阪・心斎橋で「箱男」の読書会が開かれました。集ったのは3名でしたが、濃密な時間を安部公房談義で過ごしました。この読書会を主宰された柏木さんから、ご寄稿いただきました。]

心斎橋の雑居ビルにガンジャはある。どれぐらい前にそれを知ったのか忘れたが、まあ二年ぐらい前のことだろう。この店は、とにかく暗い。赤いハロゲン灯が一つあって黒い壁を照らしている。椅子が何脚あるのかわからない、そして、店主の顔が見えない。ちょうど、店主の背中に後光のようにその灯りがあるだけで、影としてしか店主を見られない。たまに卑怯だと思う、店主からは、客の顔がしっかり見えているんじゃないか……。

読書会がしたかった。読書会をするにはいささか暗すぎるので、不向きかも知れないがこのバーには何かあると思っていた。

一番好きな作家をやろう、そして、一番好きな作品をやろう。安部公房の箱男になった。

今、手元に読み慣れた箱男がない。読書会が終わって、店主にあげてしまった。また、新しいのを買おう。とりあえず集めておいた初版の箱男がある。慣れない肌触り、文庫がいいな、と思う。雑感めいた感想になるが、箱男について思ったことを実直に書きたい。

この小説を八回ぐらい丁寧に通読したつもりだが、よくわからない。ある写真家が、「絵画は瞑想、写真は短剣の一刺し」と言ったが、この小説は間違いなく瞑想だ。私は主題が何か、といった風に、小説を要約することをはばかり、主題に圧縮できない魅力が小説には必要だからだ。それは節々に宿る、言葉の魅力でもって小説を読ませるのが、正しい小説だと思っている。さしずめ、交通標識ぐらいが写真だろうか。記号で直截に意味を汲み取れるようにしてある小説など存在しないはずだ。それでも、箱男は瞑想的な写真といった印象も受ける。絵画と写真の混在……。

この小説は、まず文章そのものが魅力である、読み手のイメージを跳躍するような比喩。これなんかどうだろう、「問い返す彼女の声に、不服の調子はとくにない。怪訝な様子さえ見られない。クリームを塗った手のひらで、卵の底をなでるような感じ。」この、卵の底をなでるような感じって、どんな感じだ？

……安部公房はこれらの比喩を思いつくのにもっとも時間を弄する、とどこかで語っていた。

あと、切ない言葉、言葉の切なさは書き手自身の言葉の経験に由来するのだろう。作家の幼少期の劣等感や、青年期の経験をくまなく調べて、それからの影響を分析することもはばかる。ただ、直接的な比喩のはっきりとした感じは、読者をつまづかせ、迷わせる。

(忘れないうちに書きとめておこう。いま思いついた、彼女に会ったらまず使ってみたい殺し文句。「君に笑ったり怒ったりしてもらいたいんじゃない。肝心なのは、笑ったり怒ったりしているのが、他人じゃなくて君だということなんだ。」)

この言葉の意味は、よくわからない。それでも、好きだ。

私は箱男を恋愛小説だと思っている、誤読の危険も感じなくはないが、読み方の多様性は作者自身歓迎してくれるだろうし、読みたいように読むのが小説だろう。

箱男と贗箱男のどちらが書いた文章なのか照査するような、実直な読書会は安易に想像できるが、私はそれをあまり良しとしない。必ず矛盾が生まれるし、一人の男が妄想で書き殴った小説だといっても差支えはないだろう、ただ看護婦は確かにいるような気がする。それも、すごく魅力的な女性に見える。どうだろう、私はもしかすると、箱男と同じ目線で、恋をしていたのかも知れない。

「保護者の寛容さで、彼女の傷口を舐めまわしているような気持でいた。そういう時には、眼から唾が出る。他人に毀される前に、自分の手で毀してやろうと、つい気負い込んでしまうのだ。上下の脛には歯が生える。彼女を齧る妄想で、ぼくの眼球は火照り、勃起してしまうのだ。」

身体と観念の交差がいちいち的確だ、それで緊張感がある。比喻の一つ一つを逃すまいと、追いかけているうちに、物語が進み、物語を見落とす。瞑想的な絵画を右から左に、あるいは上から下へ繰り返し見返したけれど、まったく何が描かれているのかわからない……。ただ直感で、この絵が好きだ、と言える。これが本当の魅力だ。

箱男になるとは、つまり、自己を放棄し、他者の世界に埋没することだ。しかし、恋愛に必要なのは、他者ではなく、まぎれもない私の現前である。他人じゃなくて私がいると、私が語らしめないといけないわけだ。しかし、匿名の魅力に溺れた箱男は簡単に箱を捨てることはできないだろう。そもそも箱男になるということが、贗者になるようなことなのだから、箱男と贗箱男の差異など必要ないのではないか。

安部公房は、わかりやすく箱を持ちだしたが、別にこれは箱じゃなくてもいいんじゃないか、とふと思う。うまく説明できないが、例えば箱男が何人かいるとして、寸分違わない段ボール箱に入っているとしても、その段ボール箱の汚れやくたびれ方は顔の表情のように、個性となってしまう。箱の汚れがそのまま個性となって、表情となる。顔の皺も太陽や動物の目線から見たら、紙の表面の汚れと違わないのではないか。よしんば個性のない個体は不可能ではないか。

……すごく、根本的な疑問だが……。そもそも箱をかぶる程度では、匿名になれないのではないか？

箱男には見る、見られる、という関係を巡って哲学的な問答がある、あのショパンと呼ばれる婚前の男や覗き見を失敗した少年Dだって、どう結びついたのでかわからない……。ただ、幻想的で詩的なイメージは、確かに、実体を持ってあらわれているように思えるし、貝殻草の話だって、どうしてあれほどリアリティがあるのだろう。

言葉がいちいち的確である。迷いが無い、輪郭が整っていて、名指される対象が、与えられた途端に光り出すから退屈しない。

この小説の魅力をただされても答えに窮する、どうだろう、言葉の魅力、文章の魅力、ただ自己の心象風景をなぞりながら、麻薬の幻影を見つつ……。もっとも、私に麻薬の経験はない。ただ、文学的な酩酊、小説の恍惚は、箱男の麻薬のようなものではあるまいか。文学の快楽が麻薬であるとは、なん



とも凡庸な解釈であるが、すでに箱男の中毒者である私は一生この快楽を思い返し、読み返すだろう。無論、箱男ではないが、箱男の依存者であると断言できる。

「そこで、考えてみてほしいのだ。いったい誰が、箱男ではなかったのか。誰が、箱男になりそこなったのか。」



### ご寄稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたのご寄稿をお待ちしております。

安部公房についての、どんな文章でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、下記のメールアドレス宛にご連絡下さい。

次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：[eiya.iwata@gmail.com](mailto:eiya.iwata@gmail.com)

## もぐら忌（公房忌）句集

睡蓮／OKADA HIROSHI

安部公房の忌日（1月22日）の名はありませんが、一昨年から「もぐら忌」を提案していたところ、昨年は睡蓮さんからも賛同を得まして、今回いくつかの句をいただきました。「公房忌」の句とともにご披露させていただきます。

睡蓮作

もぐら忌や都会の迷路出口なし

もぐら忌や合わせ鏡の孤独かな

もぐら忌にユーキッタン聞く旭川

もぐら忌にじっと見つめる妻の顔

もぐら忌に訪ねるイーハトーブかな

もぐら忌や林檎をひとつ恋人に

もぐら忌に優しく聴こゆ電子音

もぐら忌やカーテンレモン色に変え

見渡せば他者他者他者よ公房忌

汚染水いまだ流れて公房忌

もぐら忌に笑顔で踊れ死の舞踏

看護師の微笑おそろし公房忌

もぐら忌に絶望の「望」重くなり

公房忌詩人のふりで過ごす鳩

もぐら忌や桜の咲かぬ墓地もあり

OKADA HIROSHI 作

一もぐら忌に心齋橋アメリカ村での「箱男」読書会に参加して一

もぐら忌や公房偲び集ひ来る

未知の士の縁（えにし）結びて公房忌

窟（いわくら）の奥に集へり公房忌

もぐら忌に箱男読む三人（たり）かな

箱男真贋論じて公房忌

箱男愛は成りしや公房忌

もぐら忌や女は何処に箱男

箱のうち宇宙を秘める公房忌

もぐら忌や箱男のなぞ多きかな

もぐら忌やアメリカ村の夜は更けり

### 感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んでも、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

## 私の本棚より



[ここでは安部公房に関する新刊はもとより、旧刊でも、感想や批評を、また愛着のある書、自慢の逸品、などについてのエッセイを掲載していき、ファンの交流の場になれば、と思います。皆さまも今一度ご自分の本棚を見回して、これぞという本を取り上げてぜひご紹介くださいませ。写真画像（著作権に注意）の添付も歓迎です。]

『安部公房を語る』（2013/12 あさひかわ社）

岡田裕志

これまで『郷土誌あさひかわ』に掲載されてきた安部公房に関する記事・寄稿が、ついに一冊の本にまとめられて発刊されました。すばらしい出来事で、安部公房の書誌資料としてこれほど貴重なものは類を見ないと思います。快挙、と言ってよいでしょう。

旭川は安部公房の本籍地で、公房も小学校をここで過ごしたことがあります。

『郷土誌あさひかわ』は公房のいところである渡辺三子さんが発行されています。そんなわけで同誌では機会あるごとに公房の旧友知友・研究者などに寄稿を依頼されてきました。それらが積もり積もって200篇近くに上ったのです。だがそれらはなかなか一般の安部公房ファンの目にできるものではありませんでした。それが今回、身近に手にとってまとめて読むことが出来るようになったのです。限定500部ということですから、早い目に手に入れておきたいところです。

昨年3月、私たち編集部3名は旭川を訪れ、渡辺さんにも親しくお話を聞かせていただきました。そして実は私は、帰宅後、『郷土誌あさひかわ』の安部公房関係の記事が掲載された号を20数冊注文し、送っていただいたのでした。でもそれですべてでもなく、どうしようかと思っていたところでした。

この本はB5版で200ページ余の、かなりボリュームのある本で、表紙は公房と親交のあった故桂川寛氏の作品で飾られています。巻頭には『無名詩集』から「笑い」の詩が本間敬三氏の味のある書で掲げられています。渡辺さんは「世界中にいる安部公房ファンや研究者、そして未来の安部公房読者…多くの方々の手

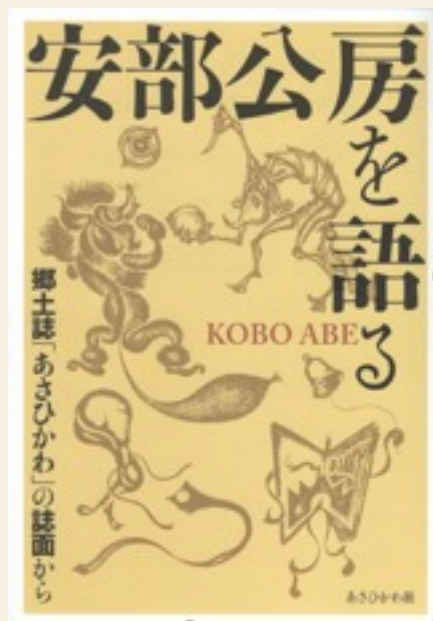
元に本書が届くことを願っております。」と書かれていて、その意気込みが伝わってきます。

中を見ると、これはどこを開いても安部公房のエッセンスがちりばめられています。それらに触れることはまるで安部公房のシャワーを全身に浴びるように感じられます。

ここではその記事の多くを紹介できませんが、たとえば実弟の井村春光氏の「昔の我が家」(p40)は、奉天の旧宅を探しに行き、見つけたお話、たとえば三浦綾子さんの「安部公房氏のお母様のこと」(p23)は安部よりみと歌会で会って好意を持ったこと、また渡辺三子さん・田中スエコさんの「安部真知を偲ぶ会」(p43)でそのようすを知り、さらに高野斗志美氏と真能(安部)ねりさんの対談(p49)などなど、どれをとっても興味深い記事で、安部公房ファンにとっては、これらに触れることは至福の時であるに違いありません。

この本の内容はまだまだ多く、この私の文にかかわらず、今後もこの本について、この欄や他のところでも、紹介や感想を書かれるよう、望んでいます。

[この本についてのお問い合わせは あさひかわ社 TEL : 0166-22-2226 まで]



## 質問箱 －資料など探索依頼と「回答」のページ－



【このページでは皆さまの安部公房に関するご質問を受けます。ご回答いただける方は編集部までご連絡下さい。質問には、これまで調べた範囲など書いていただくと手間が省けます。なお、回答が寄せられた分についても、継続してさらなる情報をお待ちしています。このページが読者の皆さまのよき交流の場となることを願っています。：<http://8010.teacup.com/w1allen/bbs>】

### 【質問】

2013年12月15日

日本共産党中央委員会  
ご担当の方へ、

お世話になります。

先日は安部公房の除名された年月日をお教え下さって、誠にありがとうございます。

一度にお訊きするべきでありましたが、安部公房の入党年月日をもご教示下さると、誠にありがたく存じます。

安部公房の研究者の間においても、この日付の確定がなされておらず、曖昧なままになっているのが現状です。

また、出来れば、このとき安部公房を党に推薦した方のお名前もご教示戴ければありがたく存じます。

差し支えない範囲で結構ですので、ご教示下さい。

ご返信をお待ち致します。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。

岩田英哉  
もぐら通信編集部

【回答】

2014年1月14日

もぐら通信編集部 岩田英哉様

ご返事が遅くなりましたことを、お詫びいたします。

安部公房氏の入党年月日についてご質問をいただきましたが、これについては記録が見つからず、現在のところ分かりません。また、入党推薦者も分かりません。

その旨、ご了承ください。

日本共産党中央委員会 質問回答係



## 安部公房の変形能力 17 : まとめ

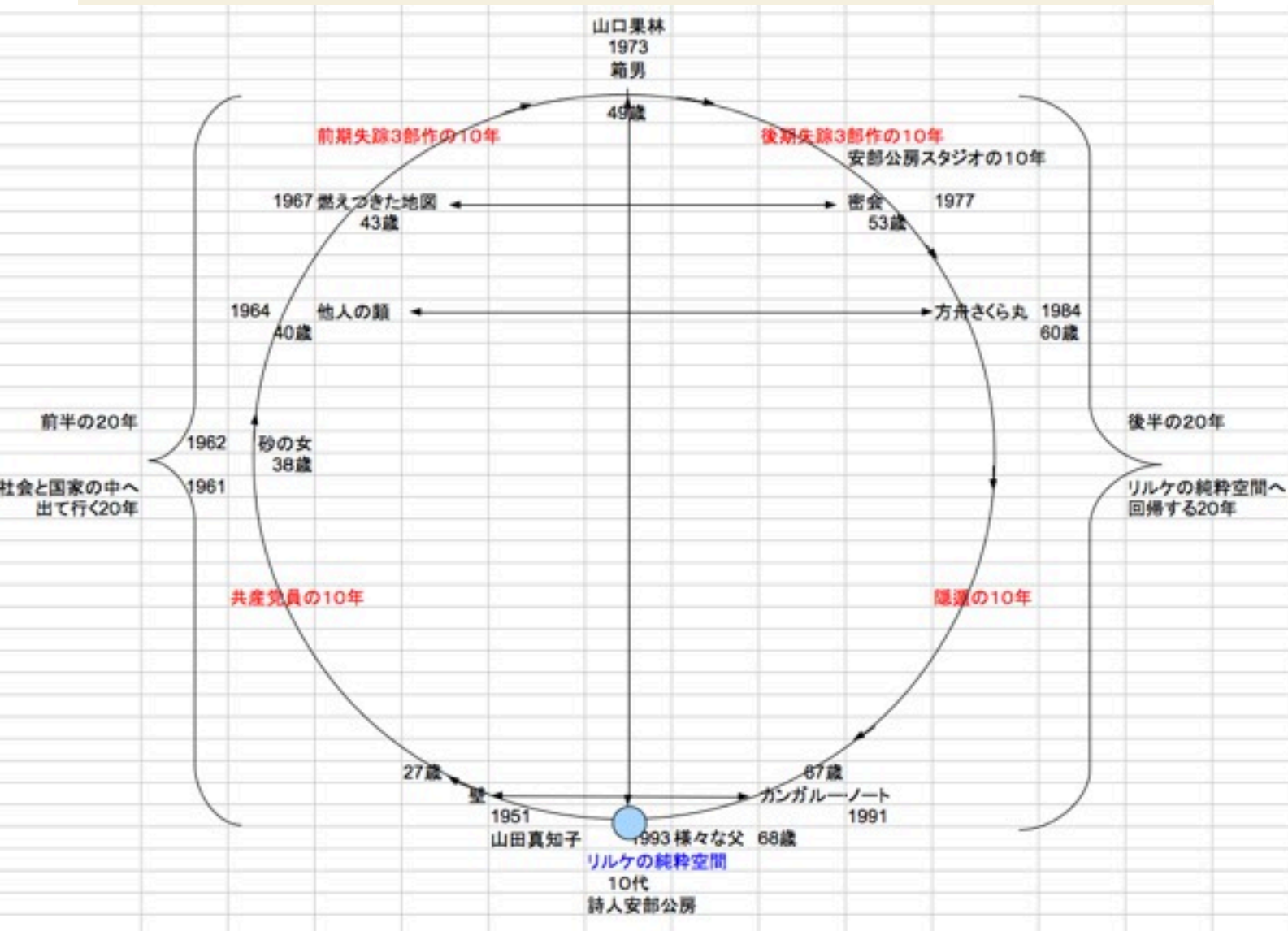
～安部公房の人生の見取り図と再帰的人間像～

岩田英哉

### I 安部公房の人生の見取り図

安部公房の人生の時間を、安部公房が位相幾何学的な思考で対称性を大切にした通りに、その人生を、リルケの純粹空間へと回帰し、帰還するものとしてとらえて図示すると、以下ようになります。

説明不要の、誠に美しい対称性を備えた、安部公房の人生ではありませんか。この図形をどのように解釈するかは、ひとまづ、あなたにお任せ致します。





## II 各章のまとめ

安部公房の変形能力と題して、ポー、ニーチェ、リルケ、ハイデッガー、ドストエフスキー、カフカ、ルイス・キャロル、シュールレアリスム、安部ヨリミを論じて来た訳ですが、このことから明らかになったことを、再度以下に簡潔にまとめることにします。

### 1. ポー

安部公房は、小学生のころからポーが好きで、級友たちにその話をしてみせたということを語っております。安部公房がポーから学んだものは、仮説設定の文学でした。安部公房は明白に、日本の私小説とその写実主義を、それは加算であり、幾ら足し算しても物事の全体を表現できないことから、これを否定し、積算である仮説設定の文学を主張しています。そして、安部公房の文学は、その通りの文学となっています。安部公房の小説の登場人物は、いづれもが、最後に積算（論理積=conjunction）によって、閉鎖空間を脱出するというプロットになっています。

### 2. ニーチェ

安部公房全集の第1巻を読みますと、安部公房は、ニーチェの『ツァラストラはかく語りき』と『悲劇の誕生』を読んでおります。安部公房のニーチェ理解は、その中壘肇宛書簡第3信（全集第1巻、72ページ下段）に明らかのように、いつもリルケと一式（セット）になっております。成城高校の時代に、リルケの詩とニーチェのこれらの著作、特に前者、『ツァラストラはかく語りき』に感溺するように読み込み、読み耽っております。リルケとニーチェの理解には、ふたつの側面があって、ひとつは、落ちる（ドイツ語のfallen）という言葉の概念を通じて、リルケ（安部公房の好きな『秋』という詩の、神の両手の中に落ちて行く地球）とニーチェ（ツァラストラの山を下りるといふ没落）を結びつけてひとつのものと考えていたということ、もうひとつの側面は、安部公房の数学的な能力に基づいて、微分と積分によって、20代以降の小説と戯曲の創造の根底にある時間の空間化という考えに、既に、10代の成城高校の時代には至っていたということです。後者の理解は、安部公房のカフカ論を読むと如実に解るということが、解りました。

### 3. リルケ

リルケは、安部公房が最も深く影響を受けたドイツの詩人です。10代でリルケ

の純粹空間を理解し、我がものとした安部公房。そのリルケの純粹空間に関する理解と認識は、20代以降の創作される小説や戯曲において、時間の空間化というリルケそのもの思考と言ってよい安部公房の思想に基づいて、生涯に亘り深い影響を及ぼしました。この意義において、安部公房は生涯、『無名詩集』の詩人でありました。

わたしの仮説は、1973年の『箱男』から、安部公房は10代のリルケの純粹空間に回帰して行ったという仮説です。安部公房が、『無名詩集』を安部公房スタジオの稽古場や箱根の仕事場にいつも傍においていたということは、上記の「1. 安部公房の人生の見取り図」で示した、わたしの仮説を裏付けています。

それは、「もぐら感覚18：部屋」で論じた通りの10代の安部公房の4つの哲学的概念（部屋、窓、反照、自己承認）で構成された、10代の時から安部公房に親しい空間に棲む孤独な男を描いたこの『箱男』が、1973年に書かれ、この小説の執筆の契機と同じ契機で始まった安部公房スタジオの活動が、それと軌を一にして開始した活動だということ、そして、その稽古場に『無名詩集』をいつも一緒においていたということが、安部公房の心中を推し量る事実を提示してくれていると思います。

1973年に、安部公房のころの中で何かが起こったのです。歴史的にみても、1973年の前後には、様々な事件が起こった日本国の時代の転換点です。今わたしが思うのは、あれほど肝胆相照らして、ころと情をお互いに通わせた親しき友、三島由紀夫が、1970年11月25日に市ヶ谷で割腹したということが、リルケの純粹空間への回帰の重要な要因のひとつになったのではないかという推測です。勿論、これはわたしの推測であり、仮説ですけれど。

さて、このように、安部公房にとっては、安部公房スタジオでの演劇も、リルケの純粹空間への回帰の一環であったのです。安部公房曰く、演劇は、時間の空間化である、と。それゆえに、稽古場に『無名詩集』を置き、またリルケらしい隠

遁生活をする箱根の職場にあっても、自分の傍にその詩集を置いていたのです。

リルケの詩の世界から、自分独自の散文の世界へと移るときに、安部公房は、リルケの詩と散文の世界を一つに纏めるために、『牧神の笛』という重要なエッセイを書いております。小さいものを大切に考える限り、自分はリルケと同じ世界にいる詩人としてあり、小ささという抽象概念を考えるときには、散文家、小説家としての自分があるという考えです。しかし、小ささという抽象概念を考えるときにも、安部公房は、物語を時間を空間化することだと考えたのですから、小説家や戯曲家としてもリルケの純粹空間の思考を生涯持ち続けたということになります。その詩人の考えで文章を書きましたので、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』に触発されて書かれた『S・カルマ氏の犯罪』等の『壁』所収の初期作品を除き、その散文は一意的ではなく、多義的であり、従い濃厚に詩文の性格を備えております。

このように、安部公房は、終生、リルケの純粹空間を憧憬した詩人であり続けました。

#### 4. ハイデッガー

安部公房は、その創造原理、即ち外部と内部の交換（次元変換、次元展開）という論理の中に、リルケの論理、即ち詩人は自己の中に一個の世界を持つという論理と、ハイデッガーの論理、即ち個人は世界の内部にある現存在であるという論理を統合し、それぞれの論理を世界一内在、世界内一在と呼んで、これらの統合概念を世界内在と命名して、統合し、統一をしました。恐るべきかな、安部公房。

#### 5. ドストエフスキー

安部公房がドストエフスキーを語るときには、いつも言語との関係で語っていることがわかりました。安部公房のドストエフスキー論を読む事で、その言語観を知る事ができました。

それは、言語の持つ働き（機能）が人間にもたらす集団化（儀式化）と個別化の力です。安部公房は、後者を評価しました。これは、安部公房の10代で認識した独自の実存の概念、即ち、個人が未分化の状態にあるという場所から終生留まって離れなかった安部公房にとっては、当然の考えでありました。

そうして、安部公房のドストエフスキー論を読むと、安部公房が、言語の構造と小説の構造を一致させて、神話的な世界の創造をしたいと考えていたことが解りました。安部公房の認識した言語と小説の構造については、「IV 再帰的な人間の書いた小説の構造」のところで、詳述します。

#### 6。カフカ

安部公房の作品がカフカに見かけ上似ているということと、安部公房がカフカの影響を執筆に際して受けたかという問題は別の問題でした。実際にカフカを読み、その価値を理解したのは、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』を読んで、散文という形式、小説の持つ可能性に開眼した後でした。

安部公房のカフカ論を読むと、10代の安部公房がニーチェとリルケをどのように、その触覚というもぐら感覚、即ちその幾何数学的な感覚と能力で理解をしたのかが解るのでした。

これが、安部公房のカフカ論の特徴でした。

安部公房は、カフカ論において、19世紀の写実主義のような加算によるのではなく、次元上の次元を創造し、物事の全体を統合する積算による小説を主張しているのです。これも、安部公房の位相幾何学の思考から言っても、当然のことでありました。

#### 7。ルイス・キャロル

ルイス・キャロルは、何と言ってもその『不思議の国のアリス』によって、安部公房の小説への道を開いた数学者の作家です。この作品に触発されて、安部公房は、1951年に、『S・カルマ氏の犯罪』を「四十時間ほど一睡もせず一気に書き上げ」ました（『〈「S・カルマ氏の犯罪」〉—安部公房スタジオ会員通信6』（全集第27巻、292ページ））。

このイギリスの作家から、安部公房が学んだことは、詩文の多義的な言葉ではなく、散文という言葉の持つ一意性を備えた文体の創造でした。『S・カルマ氏の犯罪』は、確かにそのような文体で書かれております。

## 8. シュールレアリスム

安部公房のシュールレアリスム論を読むと、何故リルケの詩の世界からシュールレアリスムまで「比較的短い道のり」（全集第21巻、438ページ、上段）であったかが、よく解りました。

それは、リルケの純粹空間という時間を捨象した空間の造形から、シュールレアリスムの、これもやはり時間を捨象した、隠喩（metaphor）で書かれた空間的な造詣に非常に通うものがあったからです。

また、安部公房のシュールレアリスム論を読むと、何故安部公房が、この時期、急激に共産主義に傾斜して行ったのか、その理由も明らかに解るのでした。それは、安部公房が、20歳のときに確立した『詩と詩人（意識と無意識）』での、意識と無意識の境域に詩人があることを、一挙に社会の抑圧と被抑圧の関係の中に人間があることにまで拡張したからです。

この間、1951年から1961年9月6日まで、安部公房は日本共産党員でした。

この10年を乗り越えて出版された傑作が、1962年の『砂の女』であることは、言うまでもありません。

## 9. 安部ヨリミ

やはり、安部ヨリミという母親からは、安部公房は、その芸術家としての能力の基礎的なものを受け継いでおりました。しかし、安部公房は、『詩と詩人（意識と無意識）』という論文の中で、母親との関係でも、一度抽象的に論理の世界では、その関係を切り離し、再度選択的に詩人がその関係を選択するというように考え、実際に小説の中で、そのように実行をし、母親を象徴（存在象徴）として描きました。

『異端へのパスポート』というエッセイによれば、母なるものもまた、定着と定住の象徴であり、父性を備えた男たる安部公房は、それを超えて、地平線の向こうへと出て行き、脱出を図るものであるからです。

また、そのような母親に対する考え方から、安部公房の独自の実存の考えと併せ

て、二種類の典型の女性への愛情が生まれました。ひとつは、性的に成熟した女性への愛であり、もうひとつは、性的に未分化の状態（実存の状態にある）偏奇な少女への愛です。

さて、以上の作家、哲学者、思潮に関して、今度はこれらを横断してみて、創造行為という視点から共通のことを抽出すると、安部公房について言うべきは、次の7つのことだと思われま

### 1。Vision

誰もこのことを言っていないと思いますが、全集第1巻を読むと、リルケとニーチェを耽読して、特に前者の作品を読んで、積極的に自己を喪うという喪失体験をしていることが、安部公房の文学を理解する上で、重要なことだと、わたしは、考えます。

その自己の喪失と引き換えに、また裏腹に得、観たヴィジョンを、安部公房は、20歳のときに『詩と詩人（意識と無意識）』に論理と詩の問題として記述したのです。

（この論文は観念的なものだとすると、これに加え、これに対して、更にその喪失体験を現実的に決定的なものにしたのは、1945年、安部公房21歳のときに父親の安部浅吉が没したことでしょう。これによって、安部公房は、その書簡にもある通りに、家も家財も一切合切を喪失しました。（中埜肇宛書簡第8信、全集第1巻、188ページ）

この論文を、あなたも、自らの頭脳と心を使い、総力を上げて理解しようとなさることを、是非お薦め致します。安部公房の一生の思考と感性の本質（エッセンス）が、ここに凝縮しております。

フランスの詩人、マラルメの言葉で、毒は薄めて飲め、という言葉があります。また同じように、料理でもそうですが、小壇に入っているエッセンス（本質）というものは、その匂いを嗅ぐと、実に美味しそうで、芳香豊かですが、舌に垂らすと猛烈に苦く、不味いものです。

安部公房の20代以降の作品は、すべて、このエッセンスを薄めながら書いたのだということを、言おうと思うとそう言える程に、この論文は、安部公房の味の

本質（エッセンス）が凝縮しております。香りは高く、味は苦い。一度挑戦してみてください。

## 2. 実存の概念

リルケに学んだ、安部公房独自の実存の概念が、これです。勿論、ニーチェでもあるでしょう。しかし、重要なことは、10代の安部公房が自分の頭で理解をし、認識をして、実存という概念を一言で実存は未分化の状態であると定義できたということです（『錨なき方舟の時代』という対談。全集第27巻、167ページ下段）。

安部公房は、この実存の場所、未分化の人間個人のありかた、これを場所と呼べば、この場所から終生離れることをしませんでした。

この安部公房独自の実存の概念が、安部公房の諸作品の秘密の部屋を開ける、敢えて言えば、存在論的な鍵なのです。

この概念が、そのまま初期の『終りし道の標べに』から晩年の『カンガルー・ノート』に至るまでの、創造活動の上での存在象徴（シンボル）の概念、演劇論や演技論のニュートラルという概念、また安部公房の主人公達の意識のあり方に、そのままなっているからです。

その人間の未分化の意味するところは、実に多様、多彩です。これは、次の再帰的人間像で詳述します。

## 3. 創作原理（位相幾何学、トポロジー）

安部公房の創作原理は、外部と内部の交換（又は内部と外部の交換、次元変換、次元展開）です。これは、そのまま安部公房の主人公たちの、積算して一次元上の次元に脱出するための思考形式でもあります。

この一次元上へと通じる、積算の場所は、例えば、奉天の郊外にあった底なし沼が安部公房の意識の中で変形した便器でありますし、また典型的には、物と物の間の隙間、間隙であるのです。この間隙という隙間が高次への接続の場所だという認識は、既に10代の『没我の地平』や『無名詩集』に見る事ができます。

『神話』と題した詩（全集第1巻、86ページ）や、『没我の地平』という詩集の中的一篇、「主観と客観」と題した詩（全集第1巻、165ページ）をお読み

下されば、よく解るのではないかと思います。

#### 4. プロット

安部公房の物語の生涯唯一のプロットは、10代の『問題下降に依る肯定の批判』（18歳）のときから、終始一貫して、閉鎖空間からの脱出です。閉鎖空間を積算によって脱出して、ひとつ上の次元へと主人公は脱出します。

安部公房は、Escapistです。

この場合、その脱出は、失踪であり、主人公の死の気配がいつも濃厚です。

#### 5. 言語論

安部公房の言語論は、言語機能論です。言語は、関数であり、function、機能であるという考えです。これは、至ってみれば実に当たり前の思想です。わたしの知るところでは、同じ思想の持ち主に、ヴィトゲンシュタインやソシュールがおります。

安部公房の場合に特別なのは、安部公房独自の実存の概念に基礎を措いて、この言語機能論が、上のドストエフスキーのところで見た様な言語の個別化の作用と、そして孤児たちが集まって創造するクレオール論と結びついていることです。安部公房の言語論を読みますと、カフカもクレオール語で書き、カネッティもクレオール語で書いた、日本語も実はクレオール語であって、安部公房もクレオール語の作家だといいたい、その気持ちがよく伝わって参ります。言語学的事実、言語歴史学的事実はどうあれ、その願い、求めたところは、とてもよく解ります。安部公房の言語論については、稿を改めます。

#### 6. 物語の構造

安部公房の好んだ位相幾何学の考え方からいって、物語はいつも出発点に回帰します。そうして、それまでのすべての物事を統合して、主人公は一次元上の次元へと脱出するのです。

安部公房が、リルケから学び、またルイス・キャロルから学んで、理解したことは、物語が現実の時間を空間化するという認識です。

時間の空間化とは、どのような考えかと言いますと、総ての物事を関係の総体と



して捉えること、関係の総体として捉えて、時間の変化を関係の変化として表現することなのです。

これが、安部公房の世界です。

従い、安部公房の世界では、追う者が追われる者になったり、医者が患者になったり、患者が医者になったり、船長が船員になったり、船員が船長になったり、役割（機能、function）の交代という形で話が進むのです。安部公房の主人公の思考する独白は、すべてのこの関係の変化、役割の交代という考え、それによる変身、変容という考えによっております。

（これがそのまま、役割の交換ということから、仮装や変装が意識されて、カーニバルや御祭りを描く安部公房の考え方の下地になっています。）

しかも、それが唯そのように行われるというのではなく、安部公房の思考が再帰的であるというところ（いつも出発点に回帰し、主人公自身に回帰するところ）に、その物語の典型的な特徴があります。これは、次章で詳述します。

## 7. 窪み

安部公房全集第1巻を読んで、わたしが思ったのは、一体安部公房が最初に見た窪み、凹は何か？という問いです。

Negativeなもの、陰画としてあるもの。凹の形状。

この窪みは、すべての安部公房の発想と思考の源泉です。10代の『〈僕は今こうやって〉』で窪みと呼んだこの形状が、そのまま接続の場所の間隙（これも陰画の一種）の在り方にも通じているし、何よりも安部公房の物事を見る時のものの見方、考え方そのものです。10代の詩文にも散文にも、この窪みはよく出て参ります。

やはり、満州奉天郊外のゴミ捨て場の底なし沼が、それなのか？いや、違います、『〈僕は今こうやって〉』を読むと、そうではない、もっと安部公房の日常にあった身近な形状である、と、そう思うのです。

安部公房の好きだったものは何かを列举してみると、発見に至るかも知れません。

これは、一種の、しかし極めて重要な備忘として、ここに記して、残しておきます。

### III 再帰的人間像

安部公房は、再帰的な人間です。A recursive man。

再帰的な人間とは、どのような人間かをお話します。

しかし、言語、言葉で説明をする前に、一体再帰的人間とはどのような姿をしているのか、それをGoogleの画像検索で見てもらった方がいいのではないかと思いましたが、その画像、いや、図像をお目にかけてから、説明に入ります。Recursive manで検索をしました。（日本語で再帰的な人間と検索しても、ほとんど何もヒットしません。これは、一般的に言って、この用語と概念に関する意識が、日本人には極めて薄いことを証明しているのではないかと思います。）



これらの図像に共通していることは、自己が自己から分岐して行くこと、そうして再び自己に回帰して行く事、即ち、合わせ鏡の世界であるということ、即ち自分の部分が自分の全体をいつも含んでいるということです。

再帰的な人間は、合わせ鏡の世界、合わせ鏡のネスト構造（入籠構造）の世界に棲んでいるのです。ロシアの人形のマトリョーシカを思い出して下さい。



従い、この人間は、他者を参照し、引用をすることをしません。いつも自己を参照し、言葉もまた自己のテキストから引用を繰り返すのです。普通の人間は、自分以外の人間の真似をして生きておりますが、再帰的な人間は、他人の真似を一切しません。つまり、自分自身を真似るのです。その限りにおいて、普通の人間から見れば、この人間は、孤独であるということになり、奇妙な人間だということになるでしょう。

また、合わせ鏡ということから、この人間は、物事の対称性ということを大切に致します。

わたしの人生において、わたしは、何人かの再帰的な人間を知っております。わたしの知っている再帰的な人間の名前を挙げるとすると、次のような人間たちがおります。

アイヒェンドルフ、ショーペンハウアー、トーマス・マン、ジャック・デリダ。  
それから、最後に小さな文字で書けば、今ここでこのようにこのような文字を書いているこの私自身（私自身という言葉が既に再帰的です）も、その人間の一人です。

確かに、上の図像の人間達は、父親や母親に似ているのではなく、人が似るようなその人の好きなひとに似ているのではなく、異様であり、異形であり、普通ではありません。それはいつも自分自身に回帰して、自己を参照するからです。言語の視点で言えば、再帰的な人間とは、自己の内部以外からは、一切言葉を引用

しない人間なのです。

ショーペンハウアーというドイツの哲学者は、その主著『意志と表象としての世界』では、ひとつの原理、即ち世界は意志であるという原理から、宇宙にある森羅万象を説明しました。その宇宙は、宇宙の根底にある意志が、自分自身を観る為に、その意志の最高の段階の生物として人間を生み、人間が宇宙を観じるとは、意志が自分自身を観じることであるという、そのような合わせ鏡の宇宙なのです。意志を純粹に認識するそのよな主体 (subject) を、ショーペンハウアーは、鏡と呼んでいます。そうして、ひとつの原理に絶えず戻り、その原理を何度も何度も反復しながら、森羅万象を説明します。これは、実に面白い本です。哲学は、人類最高の娯楽であると、わたしは思います。

ジャック・デリダというフランスの哲学者は、その英文のテキストを読むとよく解りますが、文字として、用語として、文がいつも再帰的です。再帰的とは、いつも同じ発想、同じ言葉が繰返されて語られるということの意味をしています。同じことを語りながら段々と話が遷移し、言葉の概念に対する理解と認識が深まって行くのです。(安部公房の小説の世界によく似ています。) 上の図像の持つ意味のひとつが、繰返しです。ジャック・デリダのテキストも実に面白いテキストです。哲学は、人類最高の娯楽であると、ここでも、わたしは思います。

トーマス・マンの小説も、同じ文、同じ章句が繰返し、その小説中で繰返され、話の筋の中、時間の中で、その変わらぬ言葉が繰返されて行く度に、その意味が変容し、全く別の意味を持つように、その小説が作られて、その変容に読者は胸を打たれるのです。そればかりか、後年に書かれた小説は、前に書かれたの小説の一句、一文を、小説を跨いで引用するのです。また、トーマス・マンは、その20代に、自分自身のグロテスクな、奇怪な戯画として、そのような自分自身の姿を傴僂(せむし)の、成長の止まった小男として描き(安部公房ならば実存といったことでしょう)、『小男フリーデマン氏』という傑作を書いております。

安部公房自身よる、作品を跨いで同じ語句の引用の例を挙げましょう。これは、意識的な引用というよりも、無意識の引用だと思いますけれど。いつも同じ語彙、同じ形象(イメージ)で以て、その世界を構成するという事です。

『燃えつきた地図』：

「車の流れに、妙なよどみがあり、見ると轆きつぶされて紙のように薄くなった猫の死骸を、大型トラックまでがよけて通ろうとしているのだ。」（全集第21巻、311ページ）

『密会』：

「女秘書は腹立たしげに、地面から拾った小枝の先でその布（筆者註：布団になった溶骨症の少女の母親）のかたまりを引きずり出すと、力まかせに振りまわした。車に轆きつぶされた緋色の猫の死骸のように見えた。」（全集第26巻、123ページ）

また、『箱男』の最後の救急車のサイレンと、『密会』の最初の救急車のサイレンを挙げてよいと思います。他にもこの種のことはあちこちに散見されることと思います。

さて、アイヒェンドルフの詩もいつも同じものが歌われています。森、狩り、狩人、狩りの笛の音、城、河、天（大空）、雲雀、春等々、いつも詩の要素は変わりません。この芸術家の書く小説も実はそうなのですし、その詩の中には実にシュールリアリスティックな詩が何篇もあります。その詩を18世紀から19世紀にかけて、この時期に書いたということは、わたしは素晴らしいと思っております。時間という次元の中に芸術を編成する文学史の愚かさをこそ、ひとびとは知るべきであると思います。この詩人も、時間を空間化した芸術家のひとりです。こういう芸術家に、時間を適用して、時間の次元の流れに従えというあなたの命令は、通用しないのです。何しろ、その世界には時間が存在しないのですから。

これらの特徴を一言で言えば、再帰的人間は、mannerismの人間だといってもいいのです。水戸黄門や遠山の金さんというお話のような、いつも同じひと、同じ設定、同じ話の筋が語られる、マンネリズムです。

安部公房もマンネリズム、或いはマニエリスムの作家なのです。安部公房は前衛的な、アヴァンギャルドの作家だったのではないのでしょうか。しかし、安部公房が再帰的人間である限りにおいて、わたしは、その通りだと、そう思います。そうしてみれば、確かに、安部公房の話は、いつも同じではないのでしょうか。このように言う事は、安部公房の諸作品の冒瀆でしょうか。

ショーペンハウアーは、再帰的人間として、何かに成るということは実に恐ろしい事だと正直に、その主著の中で、言っております。つまり、自分自身を参照する人間が、他人の真似をしないということの意味が、ここにあります。普通は、自分以外の人間の真似をし、他の物に容易になったりすること（典型的には役者のように）、それが普通であり、平然と行われ、罪の意識もないというのに対して、この人間は、自分が誰かに似ていたり、誰かになったり、何か自分と別のものになること、誰かの、何かの役割（機能）を演じることには、恐怖と罪の意識を覚える人間だと言い換えてもいいでしょう。他者への通路を見つけることが実に難しいと、普通の人以上に感じ、考える人間なのです。そういう人間である筈の安部公房が、演劇の世界を切り拓いたというそのころの根底には、時間の空間化があり、即ち時間の変化に対する恐怖があるのであり、時間の中で演ずる人間同士の役割を受け容れることに対する恐怖心があるのです。この理由によって、安部公房の演劇は、再帰的な人間ではない人間の書く演劇とは、全く異質なのです。

こうして、段々と安部公房に近づいて来たでしょうか。もう少し、安部公房のマンネリズムについて語ります。いつも安部公房の小説で同じ要素を挙げることにします。

- (1) 主人公は旅をする。空間から空間へ。壁からカンガルー・ノートまで。主人公は旅人であるので、その空間にあっては異邦人である。主人公の意識は、どんな細部にあっても旅をしている。儀式化された形式から抜け出して、その意識が連続している。これがこのまま、安部公房の小説の細部の描写につながる。これが安部文学の魅力の源泉。こう書いてくると、細部が安部公房の作品の多様性を保証しているということがわかります。
- (2) 細部を描きながら、登場人物の関係の変化を描いてゆく。時間は経過しない。登場人物の関係が変化するだけです。これが、安部公房の言う時間の空間化ということです。
- (3) 登場人物達が、お互いに役割（機能）を交換することができる。
- (4) 役割の交換、即ち変装、変身ということから、いつもどこかで、カーニバル、祭典、祭りが意識されて、この意識が作品の底流に流れている。
- (5) そして、この祭典の意識は、いつもこれを裏側から眺める、陰画の祭典である。

- (6) 従い、主人公はいつも、アンチヒーロであり、話のクライマックスは、いつもアンチ・クライマックスである。
- (7) 主人公は、いつも帰って来る。最初の場所に帰って来る。これは安部公房の位相幾何学の思考と感覚としても、そうである。
- (8) 主人公は、いつも自己の投影、反照を向こう側に、相手側に見る。これは、「もぐら感覚18：部屋」で論じた通り、反照として窓（鏡）の向こうに自己の投影を見るところです。そう意味では、安部公房には、最初から、又は最初には、他者はいないのです。いつも自己と、鏡に映っている自己の姿です。その仮象、夢、しかし実在の夢、非現実の現実の自分自身を自己と思う以外にはありません。
- (9) その他のいつも同じ諸要素には、思いつくままに挙げると、以下のものがあるでしょう。

夜又は闇

無名の主人公

緑の色

笛、口笛、草笛

夜

方舟

ほうき隊の老人

便所や便器

成熟した女

その脚と、特に膝小僧

偏奇な少女

鷹の父親、鷹の魚、その他の鷹の人物と物事

切符

部屋

窓

反照

自己承認の問題

閉鎖空間

閉鎖空間からの脱出というプロット

外部と内部の交換（次元転換）

まだまだ、あることでしょう。

(10) 安部公房の作品は、水戸黄門や遠山の金さんのお話と同じです。これらの主人公は、通俗的なわたしたちの心理が求めるところに従って、最後には正義が勝ち、悪を懲らしめるわけですが、しかし、普段は別人に変装し、世に隠れて生きているところが全く同じです。

安部公房の登場人物たちは、同様にみな同じ面の上に（水戸黄門や遠山の金さんならば世間という庶民の平面の世界の中で）同じ価値を持たされて並んでいて、安部公房の世界の登場人物たちは、インターネット時代の用語を使えば、みなsuperflatな世界に住んでいます。（これが普通の社会人の垂直構造になれている感覚からみると、その作品がシュールレアリスティックに見える理由です。）その世界には絶対的な正義はないので、お裁きがないのです。従い、その代わり、告発者が被告になったり、被告が告発者になったり、登場人物たちは、お互いの役割を交換し、そうすることによって、互いの関係を変化させることができます。医者が患者になったり、患者が医者になったり。船長が船員になったり、船員が船長になったり。

このような役割の交換を、人類学の用語で、communitasと呼びます。これは、人類学者の観察によれば、社会が流動化して、大きな変化を経験しているときに生まれる儀礼である（これも儀礼になりえる）と説明されています。Hatena Keywordから引用します (<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%B3%A5%E0%A5%CB%A5%BF%A5%B9>) :

「【communitas】スコットランドの文化人類学者ターナー(Victor Turner, 1920-83)が提唱した概念。

通過儀礼（イニシエーション）の中での人間関係のあり方を意味する。身分、地位、財産、男女の性別や階級組織の次元など、構造ないし社会構造の次元を超えた、あるいは棄てた反構造の次元における自由で平等な実存的人間の相互関係の在り方と定義されている。」

文化人類学者のこの観察が正しければ、安部公房の意識は、いつも変化の中に自分自身をおいていたということになるでしょうし、その限りにおいて、安部公房は終生前衛の、アヴァンギャルドの作家だったことになり、他方、その世



界の一定した諸要素の機能化によって、その世界は構造を以って安定しており（或いは逆に、構造があるので、諸要素の機能化が成り立つというべきでしょう）、偉大なるマンネリズムの作家とすることができるでしょう。この二つは、安部公房の中では、少しも矛盾しておりません。

(11) さて、このcommunitasということからも、従い、安部公房の主人公たちはみな、普通に固定した社会だと思っている社会の法律の外に生きている人間たちであるということになります。それは、安部公房の実存の考え、即ちその人間の未分化の状態という考えからいっても当然のことでしょう。法律の外に棲んでいるということ、このことが読者に安心感を与え、読者を魅了するとは、なんということでしょうか、読者というものは。

さて、図像ではなく、言語の世界に戻って、言葉で再帰的な人間を定義してみましょう。

Webster Onlineによれば、

Definition of RECURSIVE

- 1: of, relating to, or involving recursion <a recursive function in a computer program>
- 2: of, relating to, or constituting a procedure that can repeat itself indefinitely <a recursive rule in a grammar>

そして、Oxford Online Dictionaryによれば、

recursive

Pronunciation: /rɪˈkɜːsɪv/

adjective

- characterized by recurrence or repetition, in particular:
- Mathematics & Linguistics relating to or involving the repeated application of a rule, definition, or procedure to successive results: this restriction ensures that the grammar is recursive

・ Computing relating to or involving a program or routine of which a part requires the application of the whole, so that its explicit interpretation requires in general many successive executions: a recursive subroutine

とありますので、日本語でrecursive manを定義すれば、

### 再帰的人間の定義

再帰的人間とは、連続的に起こる結果に対して、いつも繰り返し、同じ規則、定義、又は手続・手順を適用する人間、或いは、その人間の一部が、常にその人間の全体を含んでいる人間である。

ということになるでしょう。

確かに、この定義は、最初に図像で掲げた再帰的な人間達の姿を言葉で定義したのものになっています。

しかし、この定義は、何故再帰的人間はそうなのかということを説明しておりません。

ここから眼を転じて、安部公房の実存の概念に眼を向けることにしましょう。そうして、この概念と再帰的な人間の関係を考えるのです。この概念を、今迄も、わたしは何度も再帰的に繰返して引用して来ました。

安部公房の実存の考えは、「実存は本質に先行するという実存主義の基本概念、本質というのは一つの規定観念であり、その規定作業の前にもっと未分化の実存が先行しているという考え方」とある、この10代で既に至った「未分化の実存」という理解と認識にあります（『錨なき方舟の時代』という対談。全集第27巻、167ページ下段。1984年。安部公房、60歳）

ここに戻って、考えましょう。この発言は60歳のときのものですから、安部公房は10代のときからずっと、このように考えて来たのだということがわかります。

この考えが、再帰的人間を生んだのだというのが、わたしの仮説であり、説明です。いや、そのような人間だったからこそ、実存の概念をそのように捉えたのかも知れません。

実は、これ以外の理由で再帰的な人間が生まれるということがあるのかも知れませんが、どうもわたしには、これ以外には思い当たる節がありません。これは、実存という新しいようですが、要するに、人間が未分化の状態のままであることを選択する、それに固執するということなのです。このような人間は、どんな時代にもいると思います。上の挙げた詩人や作家や哲学者はみな一様に、そのような人間に、わたしの眼には見えます。

さて、一人の人間が未分化であるとは、どのようなことでしょうか。まづ、一義的には、人間が分化するとは、性的に男になったり、女になったりすることであり、その次には、社会的な役割（機能）を受け容れて、その役割を演ずることであるでしょう。曰く、家族ならば、父親、母親、弟、妹、兄、社会においてならば、上司、部下、管理職、社長、医者、患者、看護婦、魚屋、指物師、大工、金物屋、と、こう名前を挙げて来ると、これらはすべて社会的な身分や職業や地位の名前になります。

未分化であるということは、これらの職業や地位を我が身に引き受けないということです。ですから、未分化な人間を素描致しますと、それは、

- 1。隠者である。
- 2。世俗のもの的一切合切を喪失している者である。
- 3。無名の者である。
- 4。無役の者である。
- 5。無知の者である。
- 6。無能の者である。
- 7。性的に未熟である。
- 8。素っ裸である。
- 9。主観と客観、subjectとobjectの分化する以前の場所にいることができる人間である。
- 10。このような人間は自分自身のことを語ることがほとんどない。対象を語ろうとすると、ひとりでにそれを變形させて自分のものではないものにして

から、再帰的に自分自身に関係させ、還って来る様にして語るのです。このことがなかなか説明が難しく、理解されることが少ないところです。このことを、再帰的でない人間に理解してもらうには、未分化の人間には、分化した自己がないので、自己については語り得ず、自己以外の対象について語り、それを自己のものに変形させるのだという理解されるでしょうか。

- 1 1。このような人間にとって、最初から世界はいつも混沌として見える。迷路に見え、迷宮に見え、謎が渦まいているように見える。社会の秩序を全く信用していないのです。
- 1 2。そのような言葉にならない混沌に言葉を与え、また与えないことが能力となり、仕事となる。
- 1 3。未分化ということから、その人間は、法律の外に生きている人間である。
- 1 4。従い、無法者であり、安部公房が自分乗っていたクライスラー製のジープの名前がrenegadeであると言って喜んだように世間に対する裏切り者であり、無法者である（山口果林著『安部公房とわたし』183ページ）。
- 1 5。法律の外に生きている人間という意味では、犯罪者又は犯罪者に相当する人間である。（トーマス・マンは、安部公房の様に、繰り返しこの種の人間を描いている。）
- 1 6。未分化ということから、分化した人間（大人、社会人）が現実だと思っものを、非現実だと思ひ、社会的な分化した人間が非現実だと思っものを現実だと考える、社会からみると、倒錯した人間である。このことを、言語との関係で、トーマス・マンは、私の言語は、あなた達の言語ではないとはっきり言っています。
- 1 7。未分化ということから、それは、上の図像で合わせ鏡の世界だと説明をしましたように、もともと自己完結して世界であり、再帰的な人間は自己完結した人間なのです。『方舟さくら丸』のユープケッチャという虫は、自己を、カフカの『変身』の主人公ではありませんが、人間ではなく、虫けらの虫として描いた自画像なのです。安部公房自身が、リルケのような人非人として、非人間的な人間として生きよう、そうして詩人から小説家に、詩人のこころのままに変身を遂げようという覚悟は、この時期を理解するための重要性を既に指摘した『牧神の午後』に詳しく、安部公房は書いております。
- 1 8。再帰的な人間は、このように自己完結した世界に棲んでおりますので、本来的に、そもそも他者を必要と致しません。他者との意思疎通の通路

を、安部公房はどの作品でも考えましたが、それは、常に二重の意味を持っておりま

- (1) ひとつは、本来自己完結していて、他者への通路を必要としないのにもかかわらず、それを自己否定して、他者と意志の疎通をしようとしていること、これがひとつ（誰にも知られない自己の内部の自己否定）。
- (2) もうひとつは、この（1）の意識の上に立って、その上で、意志の疎通を他者と図る苦勞をしているのだという、やはりこれも再帰的な人間でない人間には全く知られない苦しみ、これがひとつ（他者と関係での陰画の意思疎通）。

最初に生きる場所の、生きるために立っている前提が、分化した社会的な人間が立っている前提、即ち他者がいて、その他者と言語を使って容易に意志疎通ができるという前提とは、全く逆であるのです。

安部公房は、この再帰的な人間の持つ二重感覚を『終りし道の標べに』の「第三のノート—知られざる神—」中で、高という登場人物の口を借りて、「二重感覚」とか、「二重の判断や意志」とか、また「二重の意識」とか、そして「あの感覚」と言わせております。この登場人物は、父親がカトリックの副牧師であったという環境に居た事から「そういった環境の中で殆ど外界との交渉なしに育てられてきた」人間であり、また故あって探し求めていた房大爺という人間が、自分と同じ「あの二重感覚」の持ち主であることに気付き、その「非人間的なものに打たれ」ます。その次に、「奴（筆者註：房大爺のこと）を一つの人間の限界であり、偉大の建設者だなぞと思い込んだのだ。だがそれと同時に、何故か奴が憎くてなくなってきた。興味を持たば持つほど憎しみが強くなってくるんだ。」と、高をして、そのように、一種の近親憎悪の感情を言わせています。

恐らく読者は、この高のいう「あの二重感覚」といっていて、この登場人物が「あの」と指示するように既知のものとして言っていることに奇異な感じを抱き、上のように考えることがなければ、この小説を読んでも「あの二重感覚」がテキストからは、よく解らない事でしょう。

（この、再帰的な人間の自己否定的な二重感覚を普通の人間は持っておりません

ので、安部公房を論じると、何かいつも隔靴搔痒の言となり、何か安部公房という硬く難しい皮の表皮を引っ搔いているようなもどかしさがあり、論者のどの言を読んでも、安部公房の本質に至ったという実感が乏しく感じられがちなのは、そのためなのです。）

この二重感覚は、そのまま安部公房の贗の感覚となって形象化され、贗の父親や、贗の魚、その、贗という言葉は冠せられませんが、例えば『方舟さくら丸』に出て来る、贗の軍人たる副隊長、その他贗の船長、贗の船員、贗の船、その他諸々の安部公房の創造する贗の感覚と登場人物たちの創造の源泉になっております。

この小説の高と主人公の対話を読むと、安部公房が自己完結的な再帰的な人間としての弱点は、英雄崇拜であると考えていたことがわかります（全集第1巻、363～373ページ）。それは、自己完結した、他者を本来必要としない合わせ鏡の世界に棲んでいての、一番の弱点は、自己陶酔的な、自己愛の、通俗的な英雄の即ち自己の崇拜だからです。これを、この自己の最大の弱点を、安部公房は生涯自己否定として否定し続けたことは、作品においても、社会的事象においても、またその言語論においても、安部公房の読者ならばご存知の通りですし、また何故三島由紀夫と、安部公房曰くすべての接点において正反対のふたりであるにも拘らず（「彼との接点は、全部うらがえしになっている。」全集第29巻、73ページ下段）、その対談にあっては、肝胆相照らす、腹蔵のない親しき友であったことが（例えば、「二十世紀の文学」という対談、全集第20巻、55ページ）、お解り戴けることと思います。

こうして考えて参りますと、上で言及したように、1973年の『箱男』から、三島由紀夫の市ヶ谷での割腹自殺を契機に、安部公房はリルケの純粹空間の世界に回帰したという仮説は、十分な意義と意味を有するものだと、わたしは考えます。（リルケの最晩年の傑作『オルフェウスへのソネット』の第2部のIVやIXの詩は、時間の無い純粹空間と鏡を歌った詩となっていますが、これはまた後日の読解として、稿を改めて、お話致します。）

と、思うつくまま、連想するままに列挙すると、このようになるでしょう。さて、更に、

19. この実存のあり方は、このまま安部公房の言語論になり、哲学的な理解

と認識の源泉になっています。つまり、自分自身が未分化の状態にありますから、文法の世界で、主語と述語に入れるべき言葉が、そのものと、それ以外のものになる（分かれる）ことに対する強い抵抗と疑念があるのです。この抵抗と疑念から、安部公房の哲学的な思索能力や譬喩（ひゆ）に関する能力が生まれます。

- 20。そして、このことから、いつもそこに帰って、どのようなジャンルや分野や領域の物事であろうとも、それらの領域での物事をどれも同じように理解することができ、それらについて、同じ発想で、多彩な言語表現をすることができるという能力を獲得することができています。

これが、安部公房が多ジャンルに亘って芸術活動をすることのできた根底にある能力であり、その理由です。実存。未分化の実存です。実に単純な事実です。

また、こうも言うことができます。

- 21。再帰的な人間から、再帰的でない人間をみると、後者は何ごとすべて忘却の中で生きていると見えるのです。忘れていることを忘れていないで、それが現実だと思い込んでいる。忘れたことを本当には思い出すことがない。再帰的人間は、世間の人たちが思い込んでいることと全く逆のことを世間に観ているのです。
- 22。上に名前を挙げた再帰的な人間は、みな多分一様に10代で何らかの喪失を体験しており、それと裏腹のヴィジョンを観ているということ。安部公房の場合には、このヴィジョンは、20歳のときの論文『詩と詩人（意識と無意識）』に詳述されています。Visionというものは、物理学の世界でならば、数式で表すことのできる原理のことです。アインシュタインの $E = mc^2$ というように。アインシュタインの方程式は、 $e$ ,  $m$ ,  $c$ の3つの要素からなっていますが、安部公房の要素は、物質の世界ではなく、人間の世界のことですので、「もぐら感覚18：部屋」で論じたように、部屋、窓、反照、自己承認の4つの要素でなっています。4つ目の自己承認が、人間的な要素です。人間は物質ではありません。安部公房の場合、この4つの要素を、外部と内部の交換という原理によって説明したということです。外部と内部を交換することで、宇宙が生まれ、ものごとが生動し始め、詩人は次元転換（外部と内部の果てしない交換）を通じて、究極の反照（第三の客観）というvisionを観ることができるのです。

- 23。従い、visionを観た再帰的な人間は、この世の時間の中で、そのvisionの正しさを証明するために生きる。それに命を賭けて生きるということです。
- 24。このヴィジョンは、「小さいが、完璧なもの」（トーマス・マン18歳の作品『Vision』）として一度忘却された記憶の中から、現実的な夢として、即ち生きたものとして浮かんで来ます。安部公房は小さきものを大切にしました。この場合、この記憶の中から浮かんで来る小さなものは、既に過去の時間の中にあるものではなく、時間を脱した、そういう意味では空間的な存在（10代から晩年に至る迄、安部公房は存在象徴またはシンボルと呼ばれました）になっています。この記憶から浮かんで来る「小さいが、完璧なもの」に対して、安部公房は、性愛の感情、倒錯的なエロティックな愛情を持っていたものと思われます。つまり、執筆して、作品を創造するときに、そのような倒錯的なエロスを感じていたということです。
- 25。繰返しになりますが、再帰的人間は、いつも自分自身に帰ってくる。従い、この人間の時間は、社会や世間に棲む人間達の時間とは異なり、直線ではなく、循環する時間となっている。その戻って来るときには、正確には同じ場所ではなく、積算で次元上の同じ場所に戻って来る。つまり、再帰的な人間は、いつも何かを統合しようとしているのです。
- 26。21のこの社会に対する倒錯性が、いつも世間の人たちには理解されることが難しい原因になっていると思われる。このことの深い意味を知らなければ、読者はいつも、言葉の表面をなぞって安部公房の作品の上っ面から内へと入ることのできないもどかしさを感じる続けることになります。勿論、安部公房作品の解釈は多様であって構わないわけですけど。
- 27。23との関係で、言語に関して言えば、再帰的人間は、言語組織（作品）というヴィジョンが恰も生命を持っているかの如く、自己増殖するという考えと実感を持っています。平俗な言い方をすれば、言語組織（作品）に命を賭けているということになります。自己の個人的な人生に興味はなく、自己の創造する再帰的な世界こそが、自己の生命の宿った組織だという考えです。しかし、言語組織（作品）は、これらの再帰的な人間の思いとは無関係に、また無視するように、ひとりで成長し、自己増殖をして行きます。

以上が、大体、再帰的人間の特徴であり、その素描です。

こうして考えて参りますと、安部公房の呼んだ「閉鎖空間」としての社会は、再帰的な人間の観る合わせ鏡の世界であり、従いその社会も対称性を備えており、



そこからの脱出を図ることを、人間の社会の根底にある存在からそもそも実行しようと考えたのが、安部公房であるということになるでしょう。安部公房の書いた小説の構造は、次章でお話致します。

安部公房全集に目を通して、どこにもこの再帰的な人間、再帰的という用語が、安部公房の筆や口からは見当たりませんので、安部公房自身も再帰的な人間であり、世界の文学や哲学の世界に同じ仲間がいるとは明瞭には意識していなかったのではないかと思います。その言語論から、かろうじて、カフカやカネッティを自分の同類と観たのです。勿論、この安部公房の見立ては、間違っ  
てはいないのではないかと思います。ああ、それから、ルイス・キャロルという『鏡の国のアリス』を著した、安部公房の好きな数学者の名前も挙げることに致しましょう。

さて、日本の文学者で、安部公房と同じ再帰的人間を挙げると、埴谷雄高の名前を挙げるができます。

わたしがわたしであるということと言語で言うことができない、言えば同義語反復になってしまうことを嫌い、そのように人間と宇宙が出来ていること、即ち、わたしが未分化であると言語で言う事が出来ないこと、これが実に不愉快であるという考えに発して、埴谷雄高の書いた『死霊』という作品の文体、あの異様に長く、ネスト構造（入籠構造）の合わせ鏡で自分自身の姿と意識を観ている言葉の表現は、埴谷雄高が再帰的人間であることを示しています。

この作家が、安部公房を最初に認めて、安部公房が世に出たということには、やはり相応必然の理由と機縁があったと考えるべきでしょう。

さて、安部公房の最初の観念と思想の世界での喪失体験は、リルケに学び、その現実的な一家の長男としての喪失体験は、父の死であったと書きました。安部ねり著『安部公房伝』（同書51～52ページ）によれば、後者のときに書いたのが、「笑い」と題された『無名詩集』の最初に掲げられた詩です。

そうだとすれば、この詩を最初に描き、最後の詩として「感傷」と題した詩を描いて構造化した『無名詩集』に隠された安部公房の喪失のころと体験の意義と意味を、最初と終りのふたつの地点にたって、二つの詩を読み合わせることで、わたしたちは、その喪失による物事の、安部公房にとっての抽象化の意

義と意味を、従い真の意味で『無名詩集』という文字通り無名の詩集の価値を押し量ることができるでしょう。このような『無名詩集』の解説は、稿を改めたいと思います。

#### IV 再帰的な人間の書いた小説の構造



この図像も、recursive manでGoogleの画像検索をして得た図像です。

これは、筆を持って描いている図であるから、一層よくお解り戴けるのではないかと思います。安部公房は、このような意識で小説を書いたのです。

この構造を明確に意識して文字にしたのは、1973年の『箱男』からではないかと思います。勿論、小説としてのその最初の試みは、最初期の『白い蛾』という作品に見ることができます（全集第1巻、211ページ）。話の中に話をこしらえるという構造化の試みです。

『箱男』の手記の話者は、次の様なネスト構造の中の、a, b, c, d, eというそれぞれの次元に居て、話をしていたということなのです。一番最上位の次元にいつも固定して居るのが、19世紀の写実主義の、そして我が国の私小説の、足し算の作家たちです。安部公房のような再帰的な作家は、a, b, c, d, eのどの階層にでも出没して、その階層で話をするすることができます。



この次元は理論上又は論理上、何次元までも深め（下降方向）、また高める（上昇方向）ことができます。20歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』の次元変換、次元展開を思い出して下さい。

これが、安部公房の小説の構造です。『箱男』の次に執筆した『密会』も然りです。言葉で説明するよりも、このように図像で示した方が、解り易いのではないかと思います。

この構造は、安部公房が晩年の言語論で論じている通り、そのまま人間の認識の構造ですから、これが安部公房の認識した言語構造だということになります。

しかし、何も特別な構造ではなく、知る人ぞ知る構造です。むしろ、文学の世界の人間よりも、ソフトウェアのエンジニアの人たちの方が、人工言語において、この再帰的な構造について、数学的にはよく知っています。

また、次の様な、同様にa recursive manでGoogleの画像検索をして出て来る図像を観ると、安部公房の小説の構造がどのようなものがよく判るのではないかと思います。話法（mode）のネスト構造（入籠構造）です。



『安部公房の変形能力11：ドストエフスキー』で論じた、安部公房の小説の構造、即ち「そう。構造が全部ぬけたテントの梁みたいな小説が好きなんだ。ふつうの建物は構造と中身が対応していて、外から見ればだいたい中身が想像できるだろう。そんな小説は書く気がしない。さまざまなイメージの断片が並んでいて、一つ一つははっきりと明瞭なんだが、横に並んでいるものがいつの間にか縦に見えてくる迷路のような小説が好きなんだ」という小説の構造は、上の図像の示す通りのものです（『文学世界にテーマはいらない [聞き手] 浦田憲治』（全集第29巻、244ページ））。確かに、垂直と水平の関係が交換されるような構造になっていることがお判りでしょう。また、上で定義した再帰的人間の定義に「その人間の一部が、常にその人間の全体を含んでいる人間である」とある定義通りの人間です。

## V 安部公房のプロット

安部公房の生涯唯一のプロットは、閉鎖空間からの脱出です。

しかし、何故繰返し、再帰的な人間であるからとはいえ、このプロットを飽きることなく書き続けたのでしょうか。

この問いに答えるために、物語の一般的な構造を考察し、それから、安部公房の場合の回答を考えてみましょう。

わたしたち日本人にとって、一番親しく、解り易い物語の一般的な構造を備えた物語は、浦島太郎です。

この話を、次の様に8つの要素 (elements) に分解して、物語の構造として説明してみましょう。これは、物語の筋 (ストーリー)、時間の経過ではありません。安部公房が考えたように考えて見ようと言うのです。

しかしまづ、物語の時間の経過の粗筋として、ストーリーの話をすると、次のようになるでしょう。

昔々ある所に、浦島太郎という漁師の若者がいました。ある時、子供達が亀を苛めているところに行き当たります。そうして、浦島太郎は亀を助けます。亀は、そのお礼として、浦島太郎を背中に乗せて、竜宮城へ連れて行きます。竜宮城では、乙姫様が、浦島太郎を歓待し、鯛や平目の舞い踊り、浦島太郎は、饗応の限りを尽くされます。しかし、ある時、故郷を恋しく思った浦島太郎は、乙姫に故郷へ帰りたいという意志を伝えると、乙姫様はお土産に、決して開けてはならないという条件で、玉手箱を渡します。故郷に戻った浦島太郎は、それが昔の故郷とは違っているのに気付きます。この間、竜宮城での接待に時間の経つのを忘れていた短い時間とっていた間に、地上では何百年という長い時間が経っていたのです。絶望した浦島太郎は、乙姫の言葉を聞かず、玉手箱を開けてしまいますと、煙りが出て、その煙りに当たった浦島太郎は、あっという間に老人になってしまいます。(この後の話があって、浦島太郎は鶴になって蓬莱山へ向かって飛び去り、そこでは、乙姫様も亀になって蓬莱山に向かい、二人はそこでまた巡り会って、夫婦の神として一緒に暮らしたということになっています。)

さて、これが時系列での浦島太郎の伝説です。これを、要素分解して、時間という要素を捨象して、抽象化し、物語の骨格を抜き出すとどうなるでしょうか。これは、随分前に南出喜与次さんという小説の先生に教わったことなのですが、わたしの頭の中からその教えを引っ張り出して、以下にお伝えします。

(この方は、京都の太秦の映画撮影所で、脚本家であり、TVの脚本も書き、一度映画監督もなされた方です。名前をこそ挙げませんでしたが、何人もの作家が、その塾から育って、芥川賞や直木賞をとったとおっしゃってありました。僭越ながら、わたしでは測り知れない力を持った、確かにその通りの実力のある凄みのある厳しい先生でした。)

- (1) 浦島太郎は、「青年A」から「老人B」に移動する。  
(何が移動するかという)
- (2) 移動するのは「浦島太郎C」である。  
(何故移動するかという)
- (3) 「乙姫による過度の接待D」という媒体によって移動する。  
(どのような手法で移動させたかという)
- (4) 「乙姫による過度の接待D」は「青年A」から「老人B」に移動させるために「玉手箱E」という手法を使った。  
(何故そうせざるを得なかったかという)
- (5) 「乙姫による過度の接待D」は「亀F」という原因又は理由によって「竜宮城H」になる(行く)はめになった。  
(そこに至るきっかけは何だったのかという)
- (6) 「乙姫による過度の接待D」は「亀F」と関わりを持ったのは、「村の子供たちから亀を救済G」したというきっかけのためである。

ということになります。

この物語の骨格は、アメリカのハリウッドの脚本家が脚本家になるための教育を受ける骨格となっていて、ハリウッドで製作される映画はみな、この骨格を備えています。ディズニーの映画などは典型的にそうだと、映画を余り観ないわたしは、そう思います。この骨格は、世界のどこにでも通用する普遍的な骨格なのです。あなたも、アメリカの映画を見る時に、この骨格を念頭に描いてみてご覧なさい、納得すると思います。

さて、浦島太郎の話です。これを、話の順序に円滑な話の筋にして、時間の中においてみると、次のようになるでしょう。

C浦島太郎は（D乙姫による過度の接待の原因を作った）G村の子供達からF亀を救済したことをきっかけとして（F亀）と関わりを持ったが、（C浦島太郎自身がD乙姫による過度の接待の）F亀という原因又は理由からH竜宮城になる（行く）はめになり、D乙姫による過度の接待という媒介によって、（A青年からB老人に移動させるために）H玉手箱という手法を使うことで、A青年からB老人に移動する（させる）。

ということになります。

この構造に従って、物語を作ってみるとわかりますが（わたしも実際に作ってみました）、問題なのは、D乙姫による過度の接待という媒介なのです。このDという媒介が機能していれば、よい作品になり、機能していなければ、悪い作品になるということなのです。

さて、このDという媒介は一体何でしょうか。

話としては、何かが過剰なまでに、その主人公を応接し、接待し、又は襲い、翻弄し、主人公がもういいと飽きて、故郷に帰りたいたいと思うまでにサービス（という言葉は変かも知れませんが）を与え続ける何ものか、です。

この媒介を、普通通俗的には、ひとびとはテーマだと理解をしているようですが、本当には、そうではありません。

この文学の世界の物語の核心になる「何かが過剰なまでに、その主人公を応接し、接待し、又は襲い、翻弄し、主人公がもういいと飽きて、故郷に帰りたいたいと思うまでにサービスを与え続ける何ものか」、この媒介を、哲学の世界では、存在と呼んでいるのです。

この存在に対して正面から、小説の主人公が積極的に挑戦することになれば、埴谷雄高の『死霊』の異母兄弟たちの物語になり、これに対して、主人公が消極的に挑戦することになれば、安部公房の主人公たちのように脱出劇、又は失

踪劇の話となります。前者は、文字通りの陽画であり、後者は、陰画の世界です。脱出がいつも失踪であるのは、失踪とは、存在に知られぬように、存在から逃れて、身を隠して生きることであるからです。哲学的には隠者としての安部公房の姿です。生者の世界のこの世からみれば、それは死者の姿です。

安部公房の主人公たちの試みはすべて、哲学用語を用いて書いた初期の幾つかの小説を除き、どのように平易な語彙を使って書かれていても、この存在への消極的な挑戦といってよいのです。未分化の、無名の間人で行う、再帰的な、閉鎖空間からの脱出劇というわけです。

それが、わたくしたち読者を、安部公房の文学が惹き付ける一番大きな理由であるのだと、わたくしは、思います。

合わせ鏡の世界から脱出しようとする無名の主人公に何故あなたはそんなに惹かれるのか。

今回は、『安部公房の変形能力余話：リルケの純粹空間』と題して、安部公房が生涯憧憬し続けたリルケの純粹空間の話に致し、あなたにも、10代の安部公房の経験したようにそのまま、リルケの純粹空間を経験してもらいたいと思います。

(了)

### 投稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの投稿をお待ちしています。

どうぞ、安部公房の作品を読んで、どんな感想、どんな印象、どんな一行でも構いません。

ご投稿戴ければ、ありがたく存じます。

あなたのどんな言葉も、安部公房という人間を考え、その作品を読むことにつながり、わたしたちの人生の意義を深めることでしよう。

編集部一同、こころからお待ちしております。



## もぐら感覚19：様々と窪み

タクランケ

20歳のときに安部公房の著した論文『詩と詩人（意識と無意識）』を読み解いて、10代の安部公房の、そして20代以降最晩年に至るまでの安部公房の創作原理が、転身又はみがえ、次元変換又は次元展開であることは、この連載でも、また『安部公房の変形能力』の連載でも繰り返し論じて来た通りです。

際限の無い自己放棄、自己喪失の果てに、記憶の中から現出する、その限りにおいては既に時間を脱した事物が、物事が、過去の現実ではなく、存在象徴（シンボル）として再構成されて安部公房の眼前に立ち現れ、それを第三の客観又は究極の反照と呼んで、この様（さま）を執筆することが、安部公房の創作活動でありました。

さて、その場合に、このことは、作品のプロットとの関係では、安部公房の意識が閉鎖空間を脱出して、夜の到来とともに、その外へ出ることができたことを意味しておりました。

その脱出して振り返った場所で（敢えて振り返った時にではなく、その場所ですということにします）、この現存在、10代の安部公房の教わったドイツ語でいえばdas Dasein、ダス・ダーザイン、即ち今ここにこうしてあるということが、どのように、安部公房の眼に見えるのかということ、それが様々なという形容詞を冠されて表現される名詞の様（さま）なのです。

安部公房は、平たく、平俗に言えば、この世の様々な断面、断層をそこに観たのです。

もう少し言葉を費やすことにしましょう。

『〈様々な光を巡って〉』（全集第1巻、202ページ）というエッセイがあります。この冒頭は、次のように始まります。

「様々な光を巡って、その内部に、その背後に、その外部に、人間は永い歴史を生きて来た。絶えず脱皮し逃亡し、復た復帰しながら。それはVerlorene Sohnによって示された、あのヨーロッパの嘆きであり、Damaに凝縮された東洋の秘蹟である。」

Verlorene Sohn（正しくは、der verlorene Sohnまたはverlorener Sohn）、即ち放蕩息子については、既にもぐら通信第11号『もぐら感覚13：放蕩息子』（<http://goo.gl/zTkgRO>）で論じた通りです。

安部公房の放蕩息子は、無名に徹して生き、上に述べた安部公房の創作原理と同じ自己放棄、自己喪失に徹して、その極に至り、そうしてから、いつも最初の出発地点に回帰し、そこで変容を誰に、例え家族であろうとも知られることなく行う、無償で孤独な、透明な人間の姿でした。

そうして、上のエッセイの冒頭を見ると、この放蕩息子は、「様々な光を巡って」、「その内部に、その背後に、その外部に、人間は永い歴史を生きて来た」とあります。

これは何を言っているのでしょうか。

安部公房が言っていることは、歴史にも内部と外部と背後があるということです。そうして、内部と外部があり、また背後もあるということは、歴史が立体的なものだと考えていることがわかります。そして、そのような立体的な歴史とは、いつも「様々な光を巡って」あるのだということを言っています。

しかし、そうだとすると、そのような歴史が「様々な光を巡って」あるということは、一体何を言っているのでしょうか。

このエッセイを読むと、繰り返し人間が放蕩息子として出発し、変容し、変身して、出発点に帰還をし、そこに戻ってまた人知れず変身、変容を遂げて、また出発をする、その場所、即ち出発と帰還の場所を、「《物》」と呼び、そして更にそれを「ささやかな窪み」、即ち「《物》というささやかな

窪み」と呼び替えています（全集第1巻、203ページ上段）。

窪みとは、安部公房にとっては、このように物であり、物とは、このような放蕩息子（安部公房自身）の出発と帰還の地点であって、その地点は窪みという物であったと言っているのです（全集第1巻、203ページ上段）。

そう言った後で、個人の歴史の話を始めるところをみると、冒頭言われている歴史は人類の歴史を論じたものだということがわかります。

そうして、「小さな吾々一個人の歴史」においても、「一切がその窪みに向かって流れ注ぐ」と言っています。

人類の歴史も個人の歴史も流れ注ぐ、流れ注ぎ、流れ出、また戻って来て流れ注ぐその場所、即ち物としてある窪みとは一体何でしょうか。

この場合、安部公房が人類の歴史が立体的であると考えているように、同じ窪みに流れ込み、また流れ出て、また戻って来る個人の歴史も、立体的だと考えていることです。何故ならば、歴史がそのように循環するのであって、窪みそのものは変わらずに窪みであるからです。

この窪みとは一体何でしょうか。

以上読み来たって解ることは、この窪みは、様々な光を巡って在るということです。

さて、そうだとすると、この窪みは何でしょうか。

このエッセイの先へ参りますと、安部公房は更に次のように言っています。

「或る作家が偉大であり永遠であると言われる為には、やはりその作品がある窪みの中への落とし物でなければならぬ。〈物〉の在り方、存在の嘆きに、何処かしら一致した振動数を持っていなくてはならぬ。」

『〈様々な光を巡って〉』を書いた安部公房は、1947年、このとき、23歳になる直前のときです。

ここで、安部公房が19歳のときに書いた『〈今僕はこうやって〉』に眼を向けてみましょう。ここに初めて窪みという言葉が出て来るのです。

次のような箇所です。少し長いけれども引用します。

「(略) よく考えてみれば僕達が普段内面と言っている様なものは、全て外面から来る想像に過ぎなかったのではないだろうか。(略) 一体僕達の知り、そして感じ得るものに外面で無いものがあつたであろうか。『僕』がと云う事が既にもう外面のしるしだったのではないだろうか。勿論僕は此処で主観とか客観とかの問題を取扱っているのではない。だから僕の言う外面が客観等と言うものとは全く無関係である事は勿論の事だ。僕達の立つ所総て、僕はそれを外面と呼ぶのだ。

では内面は？ そうだ、それが問題なのだ。だが一体言葉がその内面に直接触れる等と言う事があって良いものだろうか。勿論それはいけない事だし、それに第一あり得可からざる事ではないだろうか。

だがそうかと言って僕が内面の事を全然知らない訳でも無いのだ。今の所、しかし、僕が其の内面について言える事は唯だ次の事丈なのだ。つまり面の接触を見極める事なのだ。努力して外面を見詰め、区別し、そしてそれを魂と愛の力でゆっくりと削り落として行く事なのだ。そして特に、僕達が為し得る事は、そして為さねばならぬ事は、その外面を区別し見る事を学ぶと云う事ではないだろうか。

例えば今此の庭に立つ見事な二本の樹を見給え。見る見る内に生が僕の全身から流れ出して其の樹の葉むらに泳ぎ著く。何と云うゆらめきが抔る事だろう。僕の心に繋ろうとする努力がありありと見えて来る。さあ、此処で僕達が若し最善を發揮しようとしたならば一体何うすべきなのだろうか。こんなに僕を感じさせる或るもの、そこにある秘密を見抜く可きであろうか。いやいやそんな事ではあるまい。それは限りある行為であり外面への固定に過ぎないのではあるまいか。

僕は生に近付く為には目的も方法も無いと思っている。生は対象として捉え得る性質のものではないのだ。生を思考する方向はあっても、生の方向と

云うものは決してあり得ないのだ。

だから僕は先ず其の周囲から始めようと思っている。マルテの手記は決して何も生を故意に遠まわしな象徴で示そうとしたのでも、又作品としての目的の為の手段でも何んでもないのだ。僕達が為し得るもの、いわんや言葉は、唯生の窪（くぼみ）を外面からけずり取る事丈なのだ。」

16歳の『問題下降に依る肯定の批判』ではまだ静的な内部と外部の接続を思考していたものが、18歳のこのときには、内部と外部を交換するという動的な思考に進んでいます。

ここで書いていることをその通りに読めば、安部公房の立っているところすべて外面であるということは、安部公房のいるところが、安部公房の立つという行為が、すべて何かに向かって立っているということになります。または、何かの上に、下に、右に、左に立っているということになります。または10代の安部公房にとっては、眼の前に何か生の全体があつて、それが眼の前にまで押し寄せているか、壁のように立ちはだかつて、そこにある。何かの面に直面しているということになります。こう読めますと、もうここから『終りし道の標べに』又は原題『粘土塀』、或いは『S・カルマ氏の犯罪』まではもうあと半歩という感じがします。

この直面する外面に面して、それを「魂と愛の力でゆっくりと削り落として行く事」、そして、安部公房の為し得ることは、言葉で、「唯生の窪（くぼみ）を外面からけずり取る事丈」であると安部公房は言っています。

この「唯生の窪（くぼみ）を外面からけずり取る事」が、安部公房の数学的な才能にとっては、具体的にどのような意味を持っていたかは、既に『安部公房の変形能力12：カフカ』で論じた通りです。引用の重複を避けたいと思いますので、御興味のある方は、もぐら通信（第13号）（<http://goo.gl/dPOPqL>）をお読み下さい。

さて、そうだとすると、この『〈今僕はこうやって〉』に書いてあることは、やはり、生というもの、10代の安部公房がドイツ語で学んだdas Leben、ダス・レーベン、英語のlife、生命、いのち、生活、それらを総称した概念として生と日本のドイツ文学者が訳したこの生というものが、安部公房自身の中

から溢れ出て、眼前の対象である樹木の中に入り込み、対象と安部公房の交流または対話が始まることが書かれています。内部と外部の交換です。

この叙情的な箇所には、『〈様々な光を巡って〉』で上に引用した歴史が立体的に窪みから発して、窪みへ回帰するという書き方に同じもの、同じ感覚、同じ思考が働いていることがわかります。

ここにある「生の窪み」の意味は一体何でしょうか。次のように考えることができます。

1. 生というものに窪みがある（生という全体の一部に窪みがある）
2. 生そのものが窪みである（＝生というものが窪みである）
3. 生が窪みを産み出す（生は窪みの母である）

安部公房が「生の窪み」というときには、これらの意味のどれでしょうか。

やはり、1の意味で使っているものだと思われるが正しいことでしょう。

総て自分の立つ所が外面だと観じる安部公房にとって、生の全体はいつも見えずに、その部分だけが見える。そして、全体を備えた生を知ることができるのは、いつもそこにある窪みによってなのです。

そして、その生の窪みから人類と個人の歴史が流れ出、また回帰して流入し来る。その窪みは、「《物》というささやかな窪み」、大きな窪みではなく、安部公房らしいことに、ささやかな、小さな窪みです。

問題は、何故このように考えたのかということです。

それは何故で、この問い以前に、何を安部公房は窪みとみたのか、または窪みとは何だと考えたのかという問いに答えるべきです。

この窪みは、『砂の女』の窪み、砂の穴であり、『方舟さくら丸』の洞窟であり（『鏡と呼子』という初期の短編にも洞窟が出て来ますが、多分のこの洞窟とこの話は遠く『方舟さくら丸』へと繋がるものです）、ブラックホー

ルという言葉や便器という題材に繋がるものですし、また遠くは、奉天の郊外の底なし沼にも及んでいることでしょう。

『〈様々な光を巡って〉』にある安部公房の言葉、

「或る作家が偉大であり永遠であると言われる為には、やはりその作品がある窪みの中への落とし物でなければならぬ。〈物〉の在り方、存在の嘆きに、何処かしら一致した振動数を持っていないてはならぬ。」

これを読むと、やはり「〈物〉の在り方、存在の嘆きに、何処かしら一致した振動数を持っていないてはならぬ。」とありますから、この窪みは、物の在り方です。存在の嘆きとありますから、この窪みは存在にとってはマイナスであり、否定的なものであり、凹です。

このように考えて来ると、安部公房が、次のように考えていたことがわかります。

宇宙の根底にあるものを存在と呼ぶ。この存在は窪みを持っている。この窪みから生が流れ出し、流れ出す以上時間の中で、即ち歴史となって現れ出、遠く回帰してまた再びこの窪みに戻って来る。

「ある作家が偉大であり永遠であると言われる為には」、「やはりこの窪みへの落とし物」、即ち作品自体も、この窪みを経験したものでなければならぬ。

窪みは、人間は言葉によって表すのであるから、言葉がこの窪みを経験した言葉でなければ、その作家の言葉は偉大でもなく、永遠でもなくなり、通俗に墮した、流行の作品になってしまう。作品（言語組織）も、一度この窪みに落ち、そしてそこから脱出し、また回帰し、窪みに落ちて変容、変身し、何度も何度もこの循環を繰り返すものとしてあらねばならない。

これが、18歳から23歳までの安部公房が考えたことだということになります。

『〈様々な光を巡って〉』では、このように考え、これを実行する人間を乞食と呼んでおります（全集第1巻、204ページ下段）。後年の安部公房の主人公達の、このエッセイでの、異名です。

そして、人類と個人の歴史、これを人間の歴史と呼ぶ事にしますが、人間の歴史は、この繰り返しの中で、奪うことと与えることが人間の畢竟逃れられない宿命であることを「歴史は繰り返し告げながら自分ではその度毎に忘れ去って来た」と言っています。

この人間の歴史による忘却を、安部公房は、Blankと呼んでおります。手記体の小説のどれにも必ずとっていい程最後に出て来る、それは余白のことです。余白に書かれた言葉です。それが、安部公房の小説です。

さて、少し話しを戻しますと、

「或る作家が偉大であり永遠であると言われる為には、やはりその作品がある窪みの中への落とし物でなければならぬ。〈物〉の在り方、存在の嘆きに、何処かしら一致した振動数を持ってはならぬ。」とあり、やはり、作品（言語組織）は、「〈物〉の在り方、存在の嘆きに、何処かしら一致した振動数を持ってはならぬ。」ものである以上、作品（言語による表現）は、存在の陰画であるということになります。

安部公房の作品は、総て存在の陰画として書かれたということになります。

そして、窪みから脱出する方法が、『没我の地平』や『無名詩集』に歌われる転身又はみがえ、或いは『詩と詩人（意識と無意識）』で論ぜられる次元変換又は次元展開です。この方法（安部公房は態度と呼んでいますが）によって、そして夜の到来によって、詩人は究極の反照である第三の客観、即ちあるヴィジョンを観ることができるのです。

以上が、窪みを巡って理解することのできる、存在、言葉、生、歴史、脱出、変身、変容、帰還、夜、創作原理の関係です。窪み一影一陰一夜という連想があります。



さて、わたしたちは時間の中に生きていて、それが生あるものでありますし、時間の中に生きているとは歴史の中に、即ち立体的な人間の歴史の中に生きているわけですが、この今ここにこのように在るということを、10代の安部公房はニーチェやリルケに学んで、ドイツ語でdas Dasein、ダス・ダーザインと言うことを知っておりました。これを、日本の哲学者は現存在と訳しました。

現存在というと何か特別に難しそうではありますが、何の事もなく普段ドイツ人が頻繁に使うありふれた動詞のひとつなのです。

少しこの言葉について考えて、より深く安部公房の思考と思想を理解する努力をしてみましょう。

このdasein、ダーザインという動詞は、一人称を主語にすると、

Ich bin da (= I am here or I am there)、イッヒ・ビン・ダーと発声して、わたしは、今ここにこうしているという文になります。

このdasein、ダーザインという動詞は、普通にこのように使う動詞ですので、どうしても（洒落ではありません）、ich bin (I am) だけでは足りずに、da、ダー、そこに、という副詞的な機能を有した言葉を必要とするのです。

もし、ich bin (I am) だけであれば、わたしは存在するという意味になります。そうして、わたしは存在すると日本語に訳せば、何かわかったようになって、この文が落ち着いてしまいますが、しかし、実際にドイツ語を日常の時間の中、日常の生活の中で話をしますと、このich bin (I am) だけでは、誠に不十分で、英語ならば、So what?、即ちだから何なんだ！と必ず訊かれることでしょう。

Ich、イッヒというわたしについて、このIch、イッヒが何かを定義しなければなりません。この場合、わたしたちが英語の義務教育でならったように、what are you?という問いに対する回答は、いつも職業の名前を挙げることになるのでした。

同様に、ドイツ語の場合も、わたしが何であるかを回答しようとする、多くの場合は職業の名前、身分、地位、門地、出自を言うことになるでしょう。

しかし、敢えてその問いには答えずに、ich bin (I am) とだけ言って、それ以上に言わないこと、その回答を拒否するか、又は沈黙を守ること、これが10代の安部公房が選びとり、一生このことを護ろうとして決心した純潔の、リルケに学んだ詩人のところなのです。

このことを、安部公房は、『〈様々な光を巡って〉』の中では、「リルケの、“唯、私は在ると叫べば良いのだ”と云う、雄々しくも悲しい決意」と呼んでいます（全集第1巻、204ページ下段）

この決意は、わたしは在る、ich bin (I am) とだけいって、わたしがどのようにあるのか、わたしは何なのかという問いに答えない文を生成して、それに従うという決意ですから、それは当然主語である一人称の未分化の状態を維持することの決意なのです。

即ち、これが、言葉の眼、言語の観点からみての、安部公房の実存の理解です。

こうして見て参りますと、安部公房が如何にリルケから学び、この詩人の在り方を典型的な人間の実存だと、言語との関係で、考えていたか、実に深くその教えを理解していたかが、よく解ります。

安部公房の云う余白とは、実にこのich bin (I am) の、英語の文法用語を使えば、述語部の補語の位置に来る言葉が、実は忘却の言葉、忘却された言葉であるということなのです。それ故の空白であり、余白なのです。このことは、上に述べたところで、そして特に安部公房の創作原理との関係で、お解りいただけることと思います。

それ故に、安部公房は、『〈様々な光を巡って〉』の中では、この忘却を論じ、最後には、問題とは「如何にして忘却す可きであるか？」と問い、その

解決を「それは忘却に依ってである」と答えて、エッセイの結論としているのです。

このようにこのエッセイを読み解くことで、このエッセイの主題が明らかになるのです。そうでなければ、安部公房が何を言っているのか、普通に読んでも、何が書いてあるのかよく解らないことでありましょう。

この補語の位置に来る言葉、この述語部に来る言葉が、安部公房の諸作品であることは、言うまでも在りません。

このようなことを理解しますと、一見難解な『終りし道の標べに』も非常に単純明解に理解して読む事ができます。勿論書いてあることは存在と人間の関係についてであるという意味では単純に違いありませんが、このことが如何に複雑精妙な展開を孕んでいるか、豊かな世界を創造するかということなのです。

さて、以上が、窪みを巡る話ですが、今度は、この窪みの外にある「様々な光」を巡る話です。

安部公房が、以上わたしたちが知った存在と窪みと、それから生と人間の歴史や時間の循環と、自己放棄による忘却とともに起こるそれらの変容を前提にして、その考えで、その窪みを脱して窪みの外の時間の流れ、即ち人間の歴史と現存在（日常生活）を振り返ったときに、その窪みから生まれた生の産み出す現存在（日常生活）の姿がどのように見えているのかを、安部公房は諸処に書いております。

それが、窪み一影一陰一夜に対してある、『〈様々な光を巡って〉』の、光を巡っての様々なという言葉の出番なのです。

『Memorandum 1948』と題したメモがあります（全集第1巻、483ページ）。

これを読みますと、花田清輝や野間宏らとの会合で安部公房が話したことがメモの中であって、それもどうやら二人には理解されなかったことの伺える

メモだとわかります。ここに、次のような安部公房の言葉があります。

「一九四八・五・一三

夜ノ会で真理について話す。

(略)

合理性（筆者註：実存的態度の合理性）は次元展開的Metamorphoseの一断面中最大の関心事として歴史性の内側に捉えられていることは拒めないが……。

(略) 無意識は、意識と同じ次元に展開されると云う見方も出来るが、同時に全く異質のものでなければならぬ。無意識が意識になるためには一つの深エンを飛やくする必要があるのだ。意識されるのは無意識そのものではなくDa-artig（筆者註：現存在としてそのように在る在り方でという意味）なものではなかろうか。ここでも亦方法論の確立が要求されねばならぬ。」

『〈様々な光を巡って〉』を読み解いて来たわたしたちには、この言葉が何を言っているかは、明々白々です。

「歴史性の内側に捉えられている」という言葉からは、花田清輝と野間宏が、歴史の中での人間の在り方を問題にしたことが伺われます。これに対して、当然のことながら、安部公房は、その立体的な歴史の外側へと出ることを、それも窪みから流れ出る生という生命、即ちわたしたちの根底にある存在の在り方と、そこに一緒にあるわたしたちの無意識を言語で表現することを主張したのでしょう。しかし、どうも理解を得ることができなかったようです。

このように安部公房の考えでは、「無意識が意識になるためには一つの深エンを飛やくする必要がある」という意味は、そこには「次元展開的Metamorphose」、即ち安部公房の創造原理に忠実な行為が行われる必要があるのです。

ここで注目すべきことは、「歴史の内側に捉えられていること」が、「次元展開的Metamorphoseの一断面」の一つだと言われていることです。

物の窪み、存在の窪みから物を考える安部公房は、立体的な人間の歴史の内

だけを考えるのでは不足であり、「様々な光を巡って」その外部も、上下も、背後も考えなければならない、それらの全体を捉えなければならないと考えているのです。

そうして、そのような態度で立体的な人間の歴史に対すること、それが次元変換による変身、変容のプロセスを踏み、それによってそのような歴史を観れば、それは断面として見えるということが、実に重要なことです。

安部公房にとって、現存在、das Dasein、ダス・ダーザインとしてある生の姿は、断面的な諸相として見えていたということなのです。

『名もなき夜のために』に次の箇所があります（全集第1巻、540ページ）。やはり場面は夜です。夜の到来とともに、安部公房の意識は、その部屋を脱し、又は閉鎖空間を脱して、宇宙にひろがり出るので、存在に直面して立つことになるのでした。これは、前回『もぐら感覚18：部屋』（<http://goo.gl/A952FE>）で論じた通りです。

「だから僕も、あの夜病気とは無関係に襲いかかったおどろきがあったことを、そしてそれだけについて書きたいと思うのだ。いったい現在はどこからどうやって此処にこられたのか？そしてどうやって何処かへゆきうるのか？ほんとうに、突然思出せぬ幾日かがあることに気づいたとき、僕はその失われた日があることによりも、現在あることにおどろいたのだった。現在がある。突然現在がある。いつか僕らがおどろきをやめるときが来るであろうか。僕はほんの僅かな全体を生き、無限の断面を生きている。病気さえせいぜいそれを強調しうるにすぎないのだ。しかし、その僅かな全体が、失われるかぎり失われ洗いけずられて、最後に一本の線のように細ったとき、僕らとぴったり重り合った現実のもっとも美しい童話が語りつがれるのではないだろうか。生誕を生まれ、呼吸を呼吸し、歌を歌い、驚きを驚き、死を死に、そしてすべての行為を行為する……。」

「僕はほんの僅かな全体を生き、無限の断面を生きている」という一文に、安部公房が現存在の現実を観たときの観察が書かれています。

そうして、これは全く興味深いことですし、これは稿を改めて論ずべき安部

公房に関する重要な主題の一つですが、そのように得られた現存在の現実の人間の行為が、「生誕を生まれ、呼吸を呼吸し、歌を歌い、驚きを驚き、死を死に、そしてすべての行為を行為する」と言われ、即ち英文法で言う同族目的語をとり、更に即ち従って、再帰的な関係の文を生成することなのです。

安部公房は、人間の行為はみな再帰的だと言っている。

安部公房は、そのように思考する再帰的な人間、即ち合わせ鏡の世界に生きている人間なのです。

さて、この再帰的な安部公房の思考から話を戻して、現存在の諸断面の話に戻ります。

安部公房のカフカ論、『文学と時間』で「もっと徹底した認識方法の革命が必要だ」といい、サルトルの『嘔吐』、カフカの『審判』、リルケの『マルテの手記』について論じ、物語の又は小説の固有の時間について論じています。小説固有の時間の創造には、正負ふたつの時間を考える必要があると言っていて、その数学的な解釈については、既に『安部公房の変形能力12：カフカ』で論じた通りです。引用の重複を避けたいと思いますので、御興味のある方は、もぐら通信（第13号）（<http://goo.gl/dP0PqL>）をお読み下さい。

さて、このカフカ論のその最後に次のような箇所があります。

「(略) 作品だけが結論を示す。作品以前に為しうること、言い得ることは、ただ現実の中から固有な時間を創造することだけが文学の方法であり、そのために現実を正負の時間の対立に於いて深く掘り下げねばならぬということであろう。あるいは対立自体が更に対立として捉えられたとき（それは当然なことであるが具体的な方法として捉えるのはほとんど不可能かと思われるほど困難なことである。しかし……）物語の文学と解釈の文学が一つの作品の中で渾然と一致し、それ自体対立する正負の時間の無限の層を転化する固有な時間の「束」となり、まことに一個の現実としてひたひたと脈打つこともあるのではなかろうかと夢見るのだが……。だが、現実の値を求めよ

うとする定積分は、残酷にも「束」を形成する常数を消してしまうのが約束なのである。」（全集第2巻、292ページ）。

ここにある「それ（筆者註：物語と解釈）自体対立する正負の時間の無限の層を転化する固有な時間の「束」」とあるこれが、安部公房が現存在の時間をみて見えた見え方であるのです。

そこには、「正負の時間の無限の層」があること、それを産み出すのは、作者が創造する「固有な時間の「束」」であること、このふたつです。

後者は小説固有の時間であり、前者はそれによって産み出され文字になって書かれる現存在の断面の、層としての在り方です。

安部公房にとって、現存在、もっと平たく言えば現実は、層を為して見えていた、地層のように、層をなして見えていたということです。

ここに安部公房を理解する鍵があります。

この鍵を再々度、窪みとの関係で論じると、

窪み→転身（次元変換、metamorphose）→窪みという閉鎖空間からの脱出（失踪）→現存在の無数の時間の中に見える断層→様々な時間の中に在るXXという認識→様々なXXという命名

という安部公房の思考の順序を知ることができるでしょう。

これが、遠く最晩年に書かれた小説『さまざまな父』まで響いている題名の由来であり、この小説の本題、テーマなのです。

この小説の冒頭の一行が、「いつもどおり四時十分に学校から戻ると、父が先に帰宅していた」という時間に関する文から始まるには、その様々なという言葉に冠した題名との関係で、どうしてもそう書き出すべき理由があったということなのです。この四時十分で始まる物語の時間は、上で見て来たところによれば、小説固有の時間に基づいて生まれた複数の時間の内の一つだということになりますし、その複数の時間の中には、窪みから脱出した様々な父がいることになります。

更にまた、このような連想語の鎖もあります。

窪み→脱出する→現存在を外部から眺める→様々な時間の断層が見える→断層が様々に見える→透明感覚（死と自由の感覚）→出発点への帰還→窪み→影→夜の到来→ビジョン（第三の客観、究極の反照）の到来→脱出→繰り返す

この透明な層をなすもぐら感覚については、『もぐら感覚7：透明感覚』と題して、10代の詩から論じ起こしましたので、もぐら通信（第5号：<http://goo.gl/SyVrxF>）をご覧ください。

さて、様々なという言葉から、類似の題名の小説を見てみましょう。

20代の安部公房の小説のためのメモに『複数のキンドル氏』と題したメモがあります（全集第2巻、220ページ）。このメモの冒頭は、次のように始まっています。

「複数のキンドル氏→だからこれはあるキンドル氏の物語と言ってもよい。」

ここで理解の難しいのは、「だからこれは」という接続です。何故複数の、即ち様々なキンドル氏の話が、そのままそれ故に「だからこれは」、キンドル氏の物語（小説）になるのかということの理解の接続が、普通には難しいことでしょう。しかし、上のように安部公房の思考の道筋を考えて来た読者には、この接続の理解は極めて容易な筈です。

ここで重要なこと、そうして判ることは、安部公房が物語を閉鎖空間の話と考えていることです。このことを思い出して初めて、この一文の全体を理解することができます。

そのことを明確に示しているのが『人魚伝』という短編の冒頭です（全集第16巻、107ページ）。

「ぼくがいつも奇妙に思うのは、世の中にはこれだけ沢山の小説が書かれ、また読まれたりしているのに、誰一人、生活が筋のある物語に変わってしま



うことの不幸に、気がつかないらしいということだ。(略)

物語の主人公になるということは、鏡にうつった自分のなかに、閉じこめられてしまうことである。」

ここに明解に理解できるように、安部公房は小説の主人公になることは、そのまま「だからこれは」閉鎖空間に閉じ込められた主人公の話なのであって、その主人公はそこからの脱出を試みて、成功をした暁には、様々な時間の中に入っている人間たちの姿をみるのだという発想と思考のあることがわかるでしょう。

また、この箇所を読んで判ることは、安部公房の小説の世界の内部にいる主人公は「鏡にうつった自分の中に、閉じ込められて」いるということ、即ち合わせ鏡の世界にいるということ、更に即ち再帰的な世界にいるということなのです。

安部公房の主人公達はみな再帰的な合わせ鏡の世界に生きているのです。

(このように安部公房の世界を理解することで、理解が可能になる数々の文章がある筈です。例えば、『密会』の最後の、主人公が何故「一人だけの密会にしがみつくと書かれるのか、といったように。)

さて、この『人魚伝』では、人魚を殺した主人公は閉鎖空間という物語からの脱出に成功して、振り返って現存在を眺めると、「ぼくが三人になり、四人になり、五人になり……」という、様々な、複数の自分を見るという結末になるわけです。

これは安部公房の論理としては極く自然の論理で描かれた形象(イメージ)ということになるでしょう。

安部公房の生涯唯一のプロットは、閉鎖空間からの脱出なのです。

従い、『箱男』に登場する様々な箱男については、言うまでもないでしょう。

その他にも数多く、あなたの想到する作品を思い浮かべることができること

でしょう。

この論考の最後に、安部公房が最初に観た窪みは何か？という問いに答えてみましょう。

それは、『〈僕は今こうやって〉』の中に初出する「生の窪み」の窪みです。

実際にどんなささやかな小さな物理的な窪みを見て、このようなことを発想したのかは、不明です。

しかし、言葉の眼、言語の観点から、安部公房の思考を考えることは可能です。それは、このエッセイの中にある「言葉は、唯生の窪を外面からけずりとる事丈なのだ」という10代の安部公房の言葉、それから、内面との関係で10代の安部公房が書いている「だが一体言葉がその内面に直接触れる等と言う事があって良いものだろうか。勿論それはいけない事だし、それに第一あり得可からざる事ではないだろうか。」と書いている、言葉による表現についての、安部公房の禁忌（タブー）の意識の言葉を分析、解析することで、その窪みの意義と意味を一層深く理解することができるでしょう。

この稿においても十分に安部公房の窪みは論じましたが、更にもう一度、今回は、安部公房の窪みを論じます。



## 訂正箇所

第15・16号に誤記がありましたので、訂正します。

第15号 P7 最終行

誤「じつはじつは」→正「じつは」

第16号 P13 2行目

誤「世界を」→正「世界が」

## 読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。一部は要約させていただきました。

メール配信担当：岡篤史 (w1allen)

徳村拓也様より

もぐら通信  
岡様

連絡が遅くなり申し訳ございません。さっそく配信いただきお礼申し上げます。皆様が書かれた貴重な文章をゆっくりですが楽しませていただきたいと思います。

今後ともよろしくお願いたします。

徳村拓也

桐原正二様より

「もぐら通信」編集部の皆様

あけましておめでとうございます。

いつも「もぐら通信」をお届けいただき、ありがとうございます。

ここまで継続して毎月発行されるには、さまざまなご苦勞もおありだとお察しします。僕は一読者として、みなさんの努力の結果を楽しませていただいているだけですが、これからも、感謝しながら、読ませていただきます。

今年も「もぐら通信」を、楽しみにしています！

2014年1月 桐原正二

### 感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んだの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思えます。

編集部一同、こころからお待ちしております。

滝口健一郎様より

岡さま

『私の読書遍歴』を面白く読みました。  
文庫本の『砂の女』からABEワールドがはじまったのですね！！  
大学に在籍の頃でしょうか？  
読者それぞれの「安部公房」との出会いがあるんだなあ〜と、実感いたしました。  
そして、  
遂に、  
全集も揃えられたそうでおめでとうございます。  
全集の威力＝「ABEワールドから…もう逃れられない」という実感なのでしょうか？  
安部公房は好き嫌いがハッキリする作家なのでは…安部文学は読者を選びます…相性  
がいいと、ドンドン深みにはまっていく……  
全集が揃っていないので、わたしは4週間に1度図書館に 通って、延長貸し出し続行  
ばかりしています。

『もぐら通信』に書くきっかけを与えていただいたのは岡さんでした。  
ちょっとしたのを書いて発表すると、  
さらに…  
ドンドン…  
ABE世界にのめりこんでいくのが確認できるようです。  
歓びであり恐怖でもあり…

『もぐら通信』16号冒頭の似顔絵で見る限り、岡さんは、岡田さんに似ておられま  
すねえ〜  
と、思いました。  
本年もよろしくおねがいします。

タブレットで『もぐら通信』を読む際、キンドルアプリケーションで開くと、液晶画  
面の下方に各ページが帯状に 表示され、読みたいページをタッチすると、そのページ  
を開くことができる。好きなページにジャンプできるので快適です。

滝口



**内藤由直先生より**

明けましておめでとうございます。  
今年も、どうぞよろしく願い申し上げます。  
共産党の除名日が判明したのは驚きました。  
メールしたら教えてくれるのですね。  
私も、何か分からないことがあったら問い合わせしてみようと思います。  
今年も充実した「もぐら通信」を期待しております。

**番場寛先生より**

あけましておめでとうございます。  
「もぐら通信」ありがとうございます。  
またあらたな情報もありがとうございます。  
今は故郷の新潟の田舎で過ごしております。  
みなさまと「もぐら通信」のより一層のご発展をお祈り致します。

**森田庄一様より**

あけましてお目出度うございます。  
もぐら通信16号受け取りました、大変ボリュームある内容で、  
皆様の情熱が伝わって心より感服しております。  
当地旭川は年明けは穏やかでしたが、今は吹雪いており除雪車が  
走り回っています。  
去年は、当安部公房の会に何かとご助言いただき感謝しております。

**澤井佳彦様より**

大変お世話になっております。遅ればせながら新年のご挨拶を  
申し上げます。今年もよろしく願いします。


「もぐら通信」第16号ご送付ありがとうございます。また  
当会の活動を重要ニュースに選んでいただき大変ありがとうございます。  
編集部のみなさんにもよろしくお伝え下さい。

桑原真臣様からもお便りをいただきました。

奥村飛鳥様、公益財団法人 日本近代文学館様からは年賀状をいただきました。

またこのたびの編集員の健康上のことにつきまして、次の方々から暖かいお励ましの言葉とお見舞いをいただき、感激しております。ありがとうございました。

柴田重宣様、滝口健一郎様、Natsume様、kern様、奥村飛鳥様、砂の女様



もぐら通信の予約購読は次のURL  
アドレスから：

[HTTP://  
ABEKOBOSPLACE.BLOGSPOT.JP](http://ABEKOBOSPLACE.BLOGSPOT.JP)

[abekobosplace@gmail.com](mailto:abekobosplace@gmail.com) | [www.abekobosplace.blogspot.jp](http://www.abekobosplace.blogspot.jp)

## 【合評会】

第15号と第16号の合評会を1月14日から、「もぐら通信掲示板」で開催しました。<http://8010.teacup.com/w1allen/bbs> 第17号の合評会も同様に行いますので、読者の参加をお待ちしています。

## 【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、大江健三郎様、平野啓一郎様、宮西忠正様（新潮社）、富澤祥郎様（新潮社）、北川幹雄様、三浦雅士様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

## 【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、日本近代文学館、  
コロンビア大学東アジア図書館

## 【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。

2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。

3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。

4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

## 【個人情報保護に関する方針】

ご登録いただいた個人情報は、厳重に管理し、「もぐら通信」に関すること以外に使用しません。

## 【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房解説工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://w1allen.seesaa.net/article/384171789.html>





## 編集者短信

## もぐら通信の編集者は何をしているのか？

寒い季節が続く。朝は特に厳しく、昼は暖かい日があっても、陽が落ちると急にまた寒さを感じる。ここに人体のセンサーが働いている。このセンサーは微弱な環境の変化にも対応して働くはずである。昔読んだ心理学の本で、それは16分の1の変化で知覚されるとあった。今考えると感覚器官によって異なるはずだから、何の感覚だったかが問題なのだが。このセンサーも耳を澄ますように聞こうとしなければ、感じ取れない。寒さもそうで、それにこまめに対応していくことが大切だ。この対応の仕方に間違いがよくある。寒さから身を固くして縮こまる、自然な反応のようだが、これは血流を細くして表面体温は下がり、ますます寒く感じることになる。むしろリラックスして血管を太くし、血流を促す、さらに呼吸を腹式呼吸など十分にしておいて体内燃焼を上げる、食べ物を口にする、もちろん身体をこまめに動かすなど、このようなことが効果的で、外気の寒さに対抗するには体温の上昇によるのが一番、と思う。これが毎日バイクで寒空のもと通勤している私の経験からの実感である。みなさん風邪を引かないようこの冬を乗り切ってください。

[OKADA HIROSHI]

どうも忘れっぽくていけません。前号の私の原稿で、好きな作家にP・K・ディックを挙げるのを忘れてしまいました。岡本太郎との対談「宇宙・人間・芸術」（全集008所収）で、安部がある小説を面白いと言っているのです。これが、ディックの「にせもの」という短編なんです。ハヤカワ文庫の『パーキー・パットの日々』に収録されています。とても面白い小説なので、是非読んでみてください。ただし、これを原作にした「クローン」という映画は、激しくつまらなかったです。

映画「ブレードランナー」が傑作という評価は聞きますが、私は原作「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」の方が、数倍面白いと思います。人間とアンドロイド、どちらが人間的か？そんな、哲学的なテーマが底流に流れています。ハードボイルド小説だと思いますが、主人公の心葛藤・揺れがダイレクトに伝わってきます。

ゲーム「逆転裁判5」に、箱を被る新聞部の学生が出現。しかも、盗聴していると聞き、なんだかニマリとしてしまいました。安部公房に影響されたのかも。スピンオフ作品「逆転検事」や「逆転裁判」の生みの親、巧舟（たくみしゅう）さんの「ゴーストトリック」も面白いですよ。

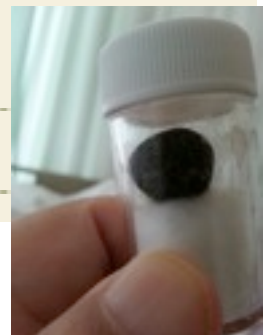
[wiallen]

この歳にして生まれて初めての入院。無呼吸症候群の検査入院である。胸から上に様々なセンサーを付着させられて一晩。顔といい頭といい顎といい包帯でぐるぐる巻きで、恰もミイラの如し。家では、CPAPという装置、酸素マスクをつけて毎晩寝ることになる●さて、このあとにまた直ぐ2日とおかずに入院である。今度は胆石性胆嚢炎故の胆嚢全摘手術なり。外科的な処置を受けるのはこれも生まれて初めて。胆石をお土産に貰えるかどうかお医者さんと交渉してみようと思う。胆石のキーホルダーなど作ってみては如何かと思うのである●入院していると時間があるので、結局アイヒェンドルフの小説『秋の魔法』を読み終え、またショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』の第三巻を読み終え、第四巻（最終巻）も読んでしまった。いと面白し。再帰的な人間の書いたテキストは、何度読んでも面白く、何かこう鎮静剤（トランキライザー）の作用がある●入院中にもぐら通信の編集をやりまうと言ったら岡田さんに叱られてしまった●以上の故に今号は1週間発行が遅くなりました。読者には了とされたい●この遅延の原因である胆石君の写真を掲載します。

[タ克蘭ケ]



安部公房

| [ciya.iwata@gmail.com](mailto:ciya.iwata@gmail.com) | [www.obosplace.blogspot.jp](http://www.obosplace.blogspot.jp)

## 【編集後記】

今号は編集員の健康上の理由から、発行が大幅に遅くなりましたが、何とぞご了承をお願いします。「もぐら通信」はこれからも永く続くべきものなので、一時の遅れも些事であれかしと存じます。またお見舞いとお励ましを戴き、有り難うございました。

巻頭に掲載しました長与日記は、本誌に托されました貴重な資料です。3, 4回にわたり掲載させていただく予定です。関係者の方に厚くお礼を申し上げますとともに、昨年亡くなられました長与孝子様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

「もぐら通信」を続けているお陰で、このような資料を提供していただき、発表していくことが出来る、そのような場として信頼されていることに、身の引き締まる思いをしています。では、今号もさまざまな記事をお楽しみ下さい。

もぐら通信編集部 連絡先: [eiya.iwata@gmail.com](mailto:eiya.iwata@gmail.com)

差出人:  
廣安部公房

〒182-0003東京都調布市若葉町  
「閉ざされた  
無限」

次号の原稿締切は2月21日（金）です。ご寄稿をお待ちしています。

## 次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. 『密会』の都市論：OKADA HIROSHI
2. 『R62号の発明』小論：wlallen
3. もぐら感覚20：窪み：タクランケ
4. 安部公房の変形能力余話：リルケの純粹空間：岩田英哉
5. その他のご寄稿

## もぐら通信執筆者別索引

<http://seesaawiki.jp/w5allen/>

にて、最新の目次と索引が閲覧できます。

(アルファベット順、次に五十音順) (敬称略)

hirokd267, marmotbaby, Mian Xiaolin, OKADA HIROSHI, w1allen, 秋川久紫, 嵐志保, 池田龍雄, 稲垣健, 岩井枝利香, 岩田英哉, 岩本知恵, 岡田裕志, 奥村飛鳥, 頭木弘樹, 加藤弘一, 清末浩平, 澤井佳彦, 柴田重宣, しめじ, 睡蓮, 水島英己, 滝口健一郎, タクランケ, 竹知佑輔, 田邊菜, トクメイ デカ K, 友田義行, 鷹岩田英哉, 花谷紫月, 番場寛, 富士原大樹, ホッタタカシ, 松川華子, 宮西忠正, 森田庄一, 山本奈緒, 吉田稔美, ロータス

○hirokd267

OKADA HIROSHIを参照のこと

○marmotbaby

1. 安部公房の写真… 第5号page 12
2. 続 安部公房の写真… 第7号page35

○Mian Xiaolin

1. 安部公房の未発表作品「天使」を読んで … 第3号page 33
2. マルテの手記と安部公房… 第4号page 7
3. 『R62号・鉛の卵』を読んで… 第4号page 37
4. 鷹岩田英哉氏の「20歳の安部公房」を読んで … 第5号page 38

○OKADA HIROSHI

1. 安部公房の愛の思想一序論 … 創刊号page 2
2. 安部公房記念館を構想する … 第2号page 11
3. 安部公房の愛の思想2 … 第3号page 15
4. 「長屋談義」：OKADA HIROSHI … 第5号page 27
5. 安部公房短編集に見る愛の思想… 第6号page22
6. 安部公房の都市論一愛の思想(4)… 第7号page44
7. 安部公房の空間と時間(1)… 第8号page49

8. 二つの文学館を訪ねて OKADA HIROSHI... 第8号page43
9. 安部公房の空間と時間(1)... 第8号page49
10. 興味尽きない公房さんのエピソード：hirokd267名義... 第9号page24
11. 私の本棚より：『安部公房とはだれか』：岡田裕志名義... 第9号page30
12. 安部公房の空間と時間（2）... 第9号page34
13. 私の本棚より：『へるめす』：岡田裕志名義... 第10号page46
14. 安部公房の空間と時間（3）... 第10号page80
15. 私の本棚より：パンフ『ウエー』：岡田裕志名義... 第11号page6
16. ポストコロニアル文学と安部公房を巡るある対話... 第11号page10
17. 安部公房の小宇宙—『永久運動』... 第12号page10
18. 私の本棚より：『安部公房全作品』全15巻：岡田裕志名義... 第12号page17
19. K A P 読書会報告：「関西安部公房オフ会」読書会報告：岡田裕志名義... 第13号page34
20. 私と安部公房とインターネット（3）... 第13号page53
21. 私の本棚より：『安部公房全集030+』岡田裕志名義... 第13号page58
22. 『箱男』の都市論：... 第14号page 16
23. 『私の本棚より』：『安部公房全集』：岡田裕志名義... 第14号page 2
24. 安部公房の愛の思想（5）... 第15号page 40
25. 私の本棚より『アサヒグラフ』昭和29年9月26日号：岡田裕志名義... 第16号page 37

## ○wlallen

1. 私の中の安部公房 … 創刊号page 5
2. 安部公房の生涯 … 第2号page 2
3. 『鉛の卵』小論 … 第3号page 18
4. 『第四間氷期』小論 … 第4号page 24
5. 文献検索術 … 第5号page 29

5. 文献検索術 … 第5号page 29
  6. 安部公房—技術と芸術が再会する場所… 第6号page31
  7. 旭川訪問記… 第7号page3
  8. 『燃えつきた地図』について… 第7号page29
  9. 『方舟さくら丸』小論… 第8号page46
  10. 『人間そっくり』小論… 第9号page21
  11. 私の本棚より：『郷土誌あさひかわ』… 第9号page28
  12. 安部公房という新種のシンククライムを根絶せよ… 第10号page31
  13. 田中裕之先生の講演を聴いて… 第10号page35
  14. 私の本棚より：『震災後に読む文学』… 第10号page45
  15. 私と安部公房とインターネット… 第11号page20
  16. 私と安部公房とインターネット（2）… 第12号page22
  17. KAP読書会報告：『箱男』のブリーフィング… 第13号page35
  18. 1984年と安部公房… 第13号page56
  19. 『さよなら アメリカ』… 第14号page 12
  20. 『飢餓同盟』小論… 第15号page 35
  21. 私の読書遍歴… 第16号page 15
  22. KAP読書会報告：読書会報告… 第16号page 30
  23. KAP読書会報告：ブリーフィング資料… 第16号page 32
- 秋川久紫
1. 『一角獣の変身』における1963年の安部公房… 第15号page 6
- 嵐志保
1. 安部公房『密会』論—絶望の書として—… 第15号page 19
  2. KAP読書会報告『密会』：卒業論文の要約… 第16号page 34
- 池田龍雄
1. 安部公房異聞… 第4号page 2
  2. 「詩的発明家—安部公房」と「懐かしの安部公房」 … 第5号page 9

3. 蜻蛉の夢... 第8号page5

4. 映画『砂の女』撮影秘話... 第12号page5

○稲垣健

1. 『けものたちは故郷をめざす』と表現者安部公房... 第15号page 38

2. 安部公房の「孤独」と「文学」の力... 雑感... 第16号page 10

○岩井枝利香

1. 安部公房ゆかりの地、旭川を訪ねて... 第2号page 3

2. 私論 安部公房「天使」... 第4号page 12

○岩田英哉

1. 安部公房誕生の秘密 ～安部ヨリミの「スフィンクスは笑う」を読み解く～ ... 第2号page 18

2. 安部公房の変形能力 ... 第3号page 19

3. 「天使」を読み解く ... 第3号page 35

4. 安部公房の変形能力2・エドガー・アラン・ポー ... 第4号page 32

5. 国立近代美術館「美術にぶるっ！」展を観て ... 第5号page 35

6. 安部公房の変形能力3：ニーチェ ... 第5号page 54

7. 戯曲『友達』稽古場訪問記... 第6号page16

8. 安部公房の変形能力4：リルケ1... 第6号page49

9. 戯曲『友達』を観る... 第7号page8

10. 『燃えつきた地図』の構造... 第7号page30

11. 安部公房の変形能力5：リルケ2... 第7号page56

12. 安部公房の変形能力6：リルケ3... 第8号page57

13. 私の本棚より：『砂の女』... 第9号page32

14. 安部公房の変形能力7：リルケ4... 第9号page36

15. 笛井事務所による『棒になった男』のオーディションを見学して... 第10号page33

16. 私の本棚より：『100人の作家100人の字』... 第10号page48

17. 安部公房の変形能力8：変形とは何か... 第10号page85

18. 安部公房の変形能力9：ハイデッカー... 第11号page27
19. 安部公房の変形能力10：ドストエフスキー... 第12号page25
20. 笛井事務所公演『棒になった男』の公開稽古を見る... 第13号page26
21. TAP読書会に参加して... 第13号page32
22. 安部公房の変形能力11：カフカ... 第13号page62
23. 安部公房の変形能力13：ルイス・キャロル... 第14号page 25
24. 『私の本棚より』：『石川淳対談集 夷齋座談』... 第15号page 44
25. 安部公房の変形能力13：シュールレアリズム... 第15号page 49
26. 安部公房の変形能力14：安部ヨリミ... 第16号page 41

○岩本知恵

1. 「闖入者」論 … 第5号page 18

○岡田裕志

OKADA HIROSHIを参照のこと

○奥村飛鳥

1. 『友達』公演までの道のり... 第6号page8
2. 安部公房が取り持つ出会い... 第10号page12
3. 「棒になった男」上演後記... 第14号page 7

○頭木弘樹

1. 安部公房、映画に行くールイス・ブニエルの「忘れられた人々」／頭木弘樹  
… 第3号page 5
2. 安部公房、映画に行く（2）ーアンドレ・カイヤットの「眼には眼  
を」... 第13号page4
3. 頭木弘樹様からのお返事：編集部... 第15号page 15

○加藤弘一

1. 『壁』の手前：第5号… page 3

○清末浩平

1. 『燃えつきた地図』について… 第3号page 11
2. 『終りし道の標べに』真善美社版について... 第8号page20
3. 5月19日『箱男』読書会レポート... 第9号page18
4. 私の本棚より：『思想の不良たち』... 第9号page29

## ○澤井佳彦

1. 東鷹栖ゆかりの作家・安部公房作品朗読会報告：東鷹栖安部公房の会... 第13号page24
2. 安部公房没後20年記念講演会報告... 第15号page 13

## ○柴田重宣

1. 「砂の女」について … 第2号page 8

## ○しめじ

1. TAP(東京・安部公房・パーティ)ミーティング報告... 第6号page36

## ○睡蓮

1. 安部公房に捧げる歌... 第6号page40
2. 安部公房に捧げる歌 その二... 第7号page54

## ○水島英己

1. ドナルド・キーン先生にお会いする... 第9号page16

## ○滝口健一郎

1. 現実生活にあらわれる「安部公房現象」について... 第6号page21
2. MEMO「安部公房現象2」... 第7号page34
3. 夢の中にあらわれる安部公房1... 第8号page19
4. 現実世界にあらわれる安部公房現象3... 第9号page13
5. 『燃えつきた地図』小説/映画... 第10号page23
6. 滝口健一郎さんと編集部との往復メール... 第10号page39
7. 「安部公房の本」との出会い... 第11号page4
8. 滝口健一郎さんと編集部との往復メール... 第11号page23
9. 『もぐら通信』... 第13号page25
10. 創作の秘密... 第15号page 11
11. 滝口さんと編集部との往復信... 第16号page 18

## ○タクランケ

1. もぐら感覚 … 創刊号page 6
2. もぐら感覚4 (触覚) ... 第2号page 14
3. もぐら感覚5 : 窓 … 第3号page 25
4. もぐら感覚・手 … 第4号page 27



5. もぐら感覚7：透明感覚 … 第5号page 45
6. もぐら感覚：笑い… 第6号page42
7. もぐら感覚9：顔… 第7号page72
8. 旭川訪問記2… 第8号page33
9. もぐら感覚10：かいわれ大根… 第8号page68
10. もぐら感覚11：自走するベッド… 第9号page47
11. もぐら感覚12：ひとさらい… 第10号page96
12. もぐら感覚13：放蕩息子… 第11号page30
13. もぐら感覚14：夜… 第12号page32
14. もぐら感覚15：便器… 第13号page74
15. もぐら感覚16：膺の父親… 第14号page 41
16. もぐら感覚17：笛… 第15号page 67
17. もぐら感覚18：部屋… 第16号page 53

## ○竹知佑輔

1. 貼りついた未来の皮膚… 第6号page33

## ○田邊栞

1. 名付けるという行為—安部公房における匿名性… 第4号page 10

## ○トクメイ デカK

1. 「アベ・コーボアのインボウ」… 第5号page 32

## ○友田義行

1. もぐらの安部公房 … 第3号page 4
2. 安部公房 X 勅使河原宏… 第10号page6

## ○膺岩田英哉

1. 18歳、19歳、20歳の安部公房（連載第1回）… 創刊号page 9
2. 18歳、19歳、20歳の安部公房（19歳、20歳の安部公房）… 第2号page 23
3. 18歳、19歳、20歳の安部公房 … 第3号page 38
4. 18歳、19歳、20歳の安部公房 … 第4号page 40
5. 安部公房の詩を読む … 第5号page 72
6. 安部公房の詩を読む2… 第6号page58



## ○花谷紫月

1. 『終りし道の標べに』をめぐるとエッセイ... 第9号page7

## ○番場寛

1. 何十年ぶりで初恋の人にあったかのような読書会... 第7号page25
2. 「所有」について一坂口恭平『独立国家のつくりかた』... 第9号page4
3. Final home (究極の家、終の棲家) ... 第10号page8

## ○富士原大樹

1. 「デンドロカカリヤ」の同時代性—戦後の植物— ... 第2号page 6
2. 「デンドロカカリヤ」の引用の深み... 第6号page28

## ○ホッタタカシ

1. 放送ライブラリーで安部公房ドラマを楽しもう! ... 第4号page 17
2. 「安部公房」に缶切りを! —安部ねり&加藤弘—トークライブ報告... 第6号page3
3. 『友達』問答... 第7号page11
4. パフォーミング・アート・センター公演『友達』評... 第8号page17
5. 夢みる機械... 第10号page54
6. 透明人間の告白 書評・『安部公房と私』山口果林... 第13号page18
7. 『友達』と踊ろう! 劇評・CHAiROIPLIN公演『FRIEND』... 第13号page29
8. 変身の恐怖 劇評・笛井事務所プロデュース公演『棒になった男』... 第14号page 4

## ○松川華子

1. 安部公房の『永久運動』公演を演出して... 第12号page14

## ○宮西忠正

1. 安部公房の「窓」... 第5号page 16

## ○森田庄一

1. 安部公房と東鷹栖... 第7号page83
2. 安部公房と東鷹栖2～地域の人が語る安部公房～... 第8号page9
3. 安部公房と東鷹栖3：資料・村史... 第9号page53

○山本奈緒

1. 「私が私であること」について考える～安部公房『手』にそって... 第10号page17

○吉田稔美

1. 三木富雄と「他人の顔」映画セット作品によせて... 第5号page 6

○ロータス

1. 「もぐら通信」を読んで... 第6号page65
2. 『終りし道の標べに』覚え書き... 第7号page42



## 第二版訂正箇所

以下の箇所を改訂し、第二版を発行します。

P13

「秋本松代」 → 「秋元松代」

P14

1. 「静岡県の利賀村」 → 「富山県の利賀村」
2. 「仙川劇場」 → 「せんがわ劇場」

P16

「荒巻」 → 「荒牧」

